

HA NE DO
羽根戸古墳群 2

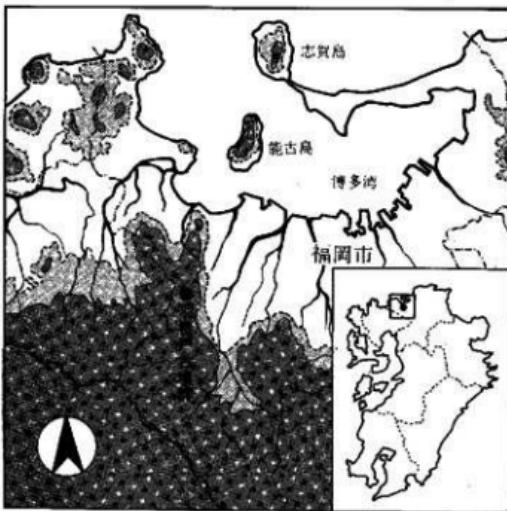


1993

福岡市教育委員会

はねど 羽根戸古墳群 2

福岡市埋蔵文化財調査報告書第345集



平成 5 年

福岡市教育委員会



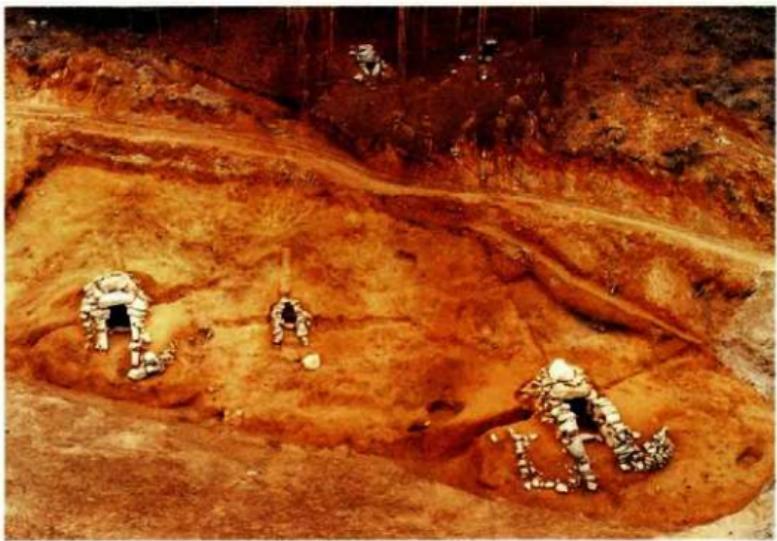
(1) 古墳群遠景（西から）



(2) 墓丘遺存状況（南から）



(1) 古墳群遠景（南西から）



(2) 石室検出状況（南から）

序

福岡市は大陸との地理的関係から、先史時代より東アジアとの交流の門戸として発展を遂げてきました。このような歴史的背景から、市内には数多くの文化財が埋蔵されています。しかしながら、近年における都市の再開発によって、我々の祖先が地中に残してきた埋蔵文化財が消滅しつつあります。このため本市教育委員会では、各種開発工事に先立って発掘調査を行い、記録保存によって後世に伝えるように努めています。本書は、西区羽根戸に予定します墓園公園の建設工事中に発見された、羽根戸古墳群Q群の発掘調査記録です。この調査では福岡市西部における古墳時代の葬送儀礼を明らかにするとともに、社会構造の解明を含む多くの成果を得ることができました。

今後、本書および調査資料が学術研究だけに留まらず、市民各位の文化財に対する認識を深めるために寄与することを深く願うものです。

最後になりましたが、発掘調査にあたり協力いただいた関係各位にたいし、深く感謝いたします。

平成5年1月

福岡市教育委員会

教育長 井口雄哉

例 言

1. 本報告書は、福岡市教育委員会が平成元年（1989年）10月23日～平成2年（1990年）2月5日において、西区大字羽根戸字佛尾に所在する羽根戸古墳群Q群を発掘調査した記録である。
2. 発掘調査は、福岡市都市整備局公園建設課の依頼により、教育委員会埋蔵文化財課が行い、同課職員瀧本正志が担当した。
3. 本書で用いた方位は全て磁北である。この方位は真北より6°21'西偏する。
4. 本書に掲載した図面では、遺構の実測は瀧本、高橋健治が担当し、遺物の実測は瀧本が担当した。トレースは唄よし子、瀧本が担当した。
5. 本書の執筆、編集は瀧本が、英訳はLISE J. HODGKINSON（九州大学）が担当した。
6. 本書で報告した発掘調査に関わる遺物・記録類の全ては、福岡市埋蔵文化財センター（福岡市博多区井相田二丁目1番94号）に収蔵されているので活用されたい。

遺跡名	羽根戸古墳群Q群		
遺跡略号	HDK-Q	調査番号	8955
調査地	福岡市西区大字羽根戸字佛尾		
調査期間	平成元年（1989）10月23日～平成2年（1990）2月5日		
開発面積	166.384m ²	調査面積	440m ²

本文目次

第1章 はじめに	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の組織	2
3. 調査の経過	3
第2章 遺跡の位置と歴史的環境	5
1. 遺跡の位置と立地	5
2. 遺跡の歴史的環境	5
第3章 調査の記録	6
1. 遺跡の概要	6
2. 1号古墳	10
3. 2号古墳	11
4. 3号古墳	12
5. 4号古墳	18
6. 5号古墳	22
7. その他の遺構	36
第4章 まとめ	38

挿 図 目 次

Fig. 1	遺跡位置図 (縮尺 1 / 200,000)	図
Fig. 2	調査前全景	3
Fig. 3	調査風景	3
Fig. 4	調査地遠景	3
Fig. 5	周辺道路分布図 (縮尺 1 / 40,000)	4
Fig. 6	古墳群分布図 (縮尺 1 / 7,500)	7
Fig. 7	周辺地形図 (縮尺 1 / 2,500)	8
Fig. 8	古墳群現況図 (縮尺 1 / 200)	折込
Fig. 9	古墳群墳丘遺存図 (縮尺 1 / 200)	折込
Fig. 10	古墳群地山整形図 (縮尺 1 / 200)	折込
Fig. 11	1号墳玄室実測図 (縮尺 1 / 50)	10
Fig. 12	1号墳出土遺物 (縮尺 1 / 3)	10
Fig. 13	2号墳玄室実測図 (縮尺 1 / 50)	11
Fig. 14	2号墳出土遺物 (縮尺 2 / 3)	11
Fig. 15	3号墳墳丘土層図 (縮尺 1 / 40)	折込
Fig. 16	3号墳石室実測図 (縮尺 1 / 50)	折込
Fig. 17	3号墳石室・外護列石実測図 (縮尺 1 / 50)	13
Fig. 18	3号墳石室実測図 (縮尺 1 / 50)	15
Fig. 19	3号墳閉塞施設実測図 (縮尺 1 / 40)	16
Fig. 20	3号墳出土遺物 (縮尺 2 / 3)	17
Fig. 21	3号墳出土遺物 (縮尺 1 / 3)	17
Fig. 22	4号墳墳丘土層図 (縮尺 1 / 30)	折込
Fig. 23	4号墳石室実測図 (縮尺 1 / 40)	折込
Fig. 24	4号墳石室実測図 (縮尺 1 / 30)	19
Fig. 25	4号墳閉塞施設実測図 (縮尺 1 / 40)	20
Fig. 26	4号墳出土遺物 (縮尺 1 / 2)	21
Fig. 27	4号墳出土遺物 (縮尺 1 / 3)	21
Fig. 28	5号墳墳丘土層図 (縮尺 1 / 40)	折込
Fig. 29	5号墳石室実測図 (縮尺 1 / 50)	折込

Fig. 30 5号墳石室・外護列石実測図(縮尺1/50)	23
Fig. 31 5号墳石室実測図(縮尺1/50)	24
Fig. 32 5号墳閉塞施設実測図(縮尺1/40)	26
Fig. 33 5号墳出土遺物(縮尺1/3)	28
Fig. 34 5号墳出土遺物(縮尺1/3)	29
Fig. 35 5号墳出土遺物(縮尺1/3)	30
Fig. 36 5号墳出土遺物(縮尺1/3)	31
Fig. 37 5号墳出土遺物(縮尺1/3)	32
Fig. 38 5号墳出土遺物(縮尺1/3)	33
Fig. 39 5号墳出土遺物(縮尺1/3)	34
Fig. 40 5号墳出土遺物(縮尺1/3・2/3)	35
Fig. 41 土壙SK01(縮尺1/40)	36
Fig. 42 土壙SK02(縮尺1/40)	36
Fig. 43 土壙SK03(縮尺1/40)	37
Fig. 44 土壙SK04(縮尺1/40)	37
Fig. 45 土壙SK05(縮尺1/40)	37
Fig. 46 土壙SK06(縮尺1/40)	37

表 目 次

第1表 羽根戸古墳群一覧.....	9
第2表 5号墳出土須恵器出土地点一覧.....	27

図版目次

表紙写真 墳丘除去後（南東から）

- 卷頭図版 1 (1) 古墳群遠景（西から） (2) 墳丘遺存状況（南から）
- 卷頭図版 2 (1) 古墳群遠景（南西から） (2) 石室検出状況（南から）
- 図版 1 (1) 調査地周辺航空写真（1948年）
- 図版 2 (1) 調査地周辺航空写真（1969年）
- 図版 3 (1) 調査地周辺航空写真（1979年）
- 図版 4 (1) 調査地周辺航空写真（1983年）
- 図版 5 (1) 調査地周辺航空写真（1987年）
- 図版 6 (1) 古墳群Q群発見状況（南から） (2) 3・4号墳発見状況（南から）
- 図版 7 (1) 古墳群Q群調査前全景（南東から） (2) 古墳群Q群調査前全景（南から）
- 図版 8 (1) 1・2号墳全景（南から） (2) 1号墳開口部（南から）
(3) 2号墳開口部（南から）
- 図版 9 (1) 墳丘遺存状況（南東から） (2) 墳丘除去後（南東から）
- 図版 10 (1) 3・4・5号墳石室石積状況（南東から） (2) 3・4・5号墳石室石積状況（南東から）
- 図版 11 (1) 3・4・5号墳石室石積状況（南から） (2) 3・4・5号墳石室石積状況（南から）
- 図版 12 (1) 3号墳調査前（南から） (2) 3号墳墳丘遺存状況（南から）
- 図版 13 (1) 3号墳閉塞状況（南から） (2) 3号墳閉塞状況（北から）
(3) 3号墳閉塞状況（玄室から）
- 図版 14 (1) 3号墳墳丘遺存状況（南から） (2) 3号墳石室石積状況（南東から）
- 図版 15 (1) 3号墳玄室（羨道から） (2) 3号墳玄門・羨道（奥壁から）
- 図版 16 (1) 3号墳玄室床面（羨道から） (2) 3号墳玄室床面（奥壁から）
- 図版 17 (1) 3号墳玄室右側壁 (2) 3号墳玄室左側壁
- 図版 18 (1) 3号墳墳丘南半部除去後（南から） (2) 3号墳墳丘断面（南から）
(3) 3号墳墳丘断面（東から）
- 図版 19 (1) 3号墳石室石積状況（南から） (2) 3号墳石室石積状況（南東から）
(3) 3号墳石室石積状況（南西から）
- 図版 20 (1) 3号墳石室石積状況（南から） (2) 3号墳墓擴掘方（南から）
- 図版 21 (1) 4号墳調査前（南から） (2) 4号墳墳丘遺存状況（南から）

- 図 版22 (1) 4号墳閉塞状況（南から） (2) 4号墳閉塞状況（南から）
 (3) 4号墳閉塞状況（北から）
- 図 版23 (1) 4号墳玄室（羨道から） (2) 4号墳玄室床面（羨道から）
 (3) 4号墳玄室内遺物出土状況
- 図 版24 (1) 4号墳石室石積状況（南から） (2) 4号墳石室石積状況（東から）
- 図 版25 (1) 4号墳墳丘南半部除去後（南から） (2) 4号墳石室石積状況（南から）
 (3) 4号墳墓壙掘方（南から）
- 図 版26 (1) 5号墳発見状況（南から） (2) 5号墳調査前（南から）
- 図 版27 (1) 5号墳閉塞状況（南から） (2) 5号墳閉塞状況（南から）
 (3) 5号墳閉塞状況（玄室から）
- 図 版28 (1) 5号墳墳丘遺存状況（南から） (2) 5号墳墳丘遺存状況（南から）
- 図 版29 (1) 5号墳玄室（羨道から） (2) 5号墳玄室・羨道（奥壁から）
- 図 版30 (1) 5号墳玄室奥壁 (2) 5号墳玄室左側壁
 (3) 5号墳玄室右側壁
- 図 版31 (1) 5号墳墳丘南半部除去後（南から） (2) 5号墳墳丘断面（東から）
 (3) 5号墳墳丘断面（南から） (4) 5号墳周溝東部堆積状況
 (5) 5号墳周溝北部堆積状況
- 図 版32 (1) 5号墳墳丘除去後（南から） (2) 5号墳墳丘除去後（南から）
- 図 版33 (1) 5号墳墳丘除去後（東から） (2) 5号墳墳丘除去後（西から）
- 図 版34 (1) 5号墳外護石積部断面 (2) 5号墳外護石積部断面
- 図 版35 (1) 5号墳石室石積状況（東から） (2) 5号墳石室石積状況（西から）
- 図 版36 (1) 5号墳石室石積状況（南から） (2) 5号墳石室石積状況（南から）
 (3) 5号墳墓壙掘方（南から）
- 図 版37 (1) 土壙SK01（南から） (2) 土壙SK02（東から）
 (3) 土壙SK03（北から） (4) 土壙SK04（北から）
 (5) 土壙SK05（東から）
- 図 版38 (1) 1・2・3号墳出土遺物
- 図 版39 (1) 4・5号墳出土遺物
- 図 版40 (1) 5号墳出土遺物
- 図 版41 (1) 5号墳出土遺物
- 図 版42 (1) 5号墳出土遺物
- 図 版43 (1) 5号墳出土遺物
- 図 版44 (1) 3・4・5号墳出土遺物



Fig. 1 遺跡位置図 (縮尺 1/200,000)

第1章 はじめに

1. 発掘調査に至る経過

近年の福岡市は、九州地方の中核都市として、さらに環日本海、環東中国海の中心都市として発展を遂げています。このため、人々の都市への集中化が顕著に進み、1992年（平成4年）には125万人を超えるました。この人口の増加に伴って道路、住宅に代表される生活基盤の整備はもちろん、公民館や公園などの生活関連施設の整備が求められています。このため福岡市では、21世紀に向けた「豊かな自然環境と活力あふれる街の中にうるおいとやすらぎのある都市」づくりを推進し、その施策の一つとして霊園施設の充実を図っています。

西部霊園が建設される以前の状況は、市の中心部には平尾霊園（南区平和4丁目）、東部には三日月霊園（東区香椎）が設置されていました。しかし、平尾霊園は3649基、三日月霊園は1014基という霊園の利用区画数は、125万人市民の利用希望を満たすには不十分な状況であったといえます。また、都市化の中で農地、山林等が失われ、緑地が減少していく状況に対しても対策を講じる必要があります。このため、市内を囲む「緑の環」と市街地に貫入する4本の「緑の腕」（中央緑地帯、片隈丘陵地、東の腕、西の腕）を守りながら、市街地に特色ある緑の拠点を整備する、水と緑のネットワークづくりを進めることとしました。さらにこの計画の中で、各「緑の腕」の拠点の一つに墓園を位置づけ、設置することにより、先述した市民の希望と環境が守られるものとかんがえています。「東の腕」の拠点には三日月霊園、「中央緑地帯」の拠点には平尾霊園があります。このため「西の腕」の拠点として、さらに市民の霊園の利用希望を果たすため、西区羽根戸地区に西部霊園を建設することを昭和57年12月23日に都市計画決定しました。この設計では、飯盛山の山麓に多目的広場や遊水池のある芝生広場をはじめとする自然公園と3,950基からなる墓所を建設することにしました。

しかしながら、霊園の建設面積は16.6haと広大であり、霊園および関連施設の建設予定地内には周知の遺跡が存在していることから、建設を担当する公園建設課と埋蔵文化財課との間で協議が行なわれました。この協議の結果に基づき、埋蔵文化財課は、1985年～1988年の間に4次にわたる発掘調査を実施し、霊園建設予定地内における埋蔵文化財の問題は解消したと考えていました。しかしながら、霊園建設中の1989年8月、公園建設課より古墳の発見届が提出されました。これを受けた埋蔵文化財課では係員を派遣したところ、5基の古墳の存在（岡版6）を確認しました。このため、公園建設課と埋蔵文化財課との間で新たに協議が行なわれ、保存が困難な3・4・5号の3基の古墳については記録保存を目的とした発掘調査を行なうことになりました。発掘調査は平成元年（1989年）10月23日～平成2年（1990年）2月5日に、出土資料、記録類の整理、発掘調査報告書の刊行は1992年度に実施しました。

2. 調査の組織

1989年度の組織

調査委託	福岡市都市整備局
調査主体	福岡市教育委員会
	教 育 長 佐藤 善郎
	教 育 次 長 尾花 剛
	文 化 部 長 川崎 賢治
	埋蔵文化財課長 柳田 純孝
	同課第1係長 飛高 憲雄
調査担当	埋蔵文化財課 滝本 正志
事務担当	埋蔵文化財課 松延 好文
調査補助	高橋 健治

1992年度の組織

調査委託	福岡市都市整備局
調査主体	福岡市教育委員会
	教 育 長 井口 雄哉
	教 育 次 長 井上 剛紀
	文 化 財 部 長 花田 免一
	埋蔵文化財課長 折尾 学
	同課第1係長 飛高 憲雄
調査担当	文化財整備課 滝本 正志
事務担当	埋蔵文化財課 寺崎 幸男

調査協力 有田吉太, 伊藤みどり, 牛尾秋子, 牛尾奈美枝, 牛尾二三子, 牛尾 豊, 大内文恵, 尾崎達也, 尾崎八重, 金子ヨシ子, 菊地栄子, 倉光ナツ子, 柳 光雄, 白坂フサヨ, 正崎由須子, 慶慶とみ子, 岳美保子, 奥略 初, 錦山千鶴子, 西鳴サキ, 西鳴マツ子, 林 嘉子, 平田タマエ, 平田千鶴子, 平田勇夫, 平野ミサヲ, 細川ミサヲ, 山西人美, 結城シズ, 結城千賀子, 結城信子, 結城弥澄, 脇坂武実, 脇坂ミサヲ,

資料整理 牛尾美保子, 内山峯子, 尾崎京子, 斎藤美紀枝, 藤アイ子, 嘴よし子, 日名子節子, 藤吉芽里, 真名子順子, 松崎浩子, 渡辺ちず子

3. 調査の経過

発掘調査は平成元年（1989年）10月23日に着手し、約3ヶ月半の期間を経て平成2年（1990年）2月5日に終了した。

調査区は3～5号墳を中心とする440m²に設定した。1・2号墳は保存されることになっているが現況図作成や玄室内の確認調査は行なった。5基の古墳とも、羨道の天井部が開口しており、玄室内が大規模に擾乱していたことから、盜掘を受けていることは確実である。各号墳とも丘陵斜面に築造されているために、谷部側の位置にあたる施設の後退、墳丘の一部が崩壊していた。4号墳は玄室天井部が欠失していたが、他の古墳の玄室は原形を保っていた。

日誌抄

平成元年（1989年）

10月23日 機材を搬入し、調査事務所を設置。古墳の裾部が工事造成土で埋められているので除去を依頼。

24日 測量基準杭を設置し、平板測量を開始。

11月11日 墳丘の遺存状況図作成。

25日 3号墳墳丘の土層図を作成。

12月21日 5号墳の石室実測図作成。

平成2年（1990年）

1月6日 3号墳の外護列石を実測。

2月5日 5号墳墓壙掘方を実測、写真撮影。
機材、遺物などを搬出。調査終了。



Fig. 2 調査前全景

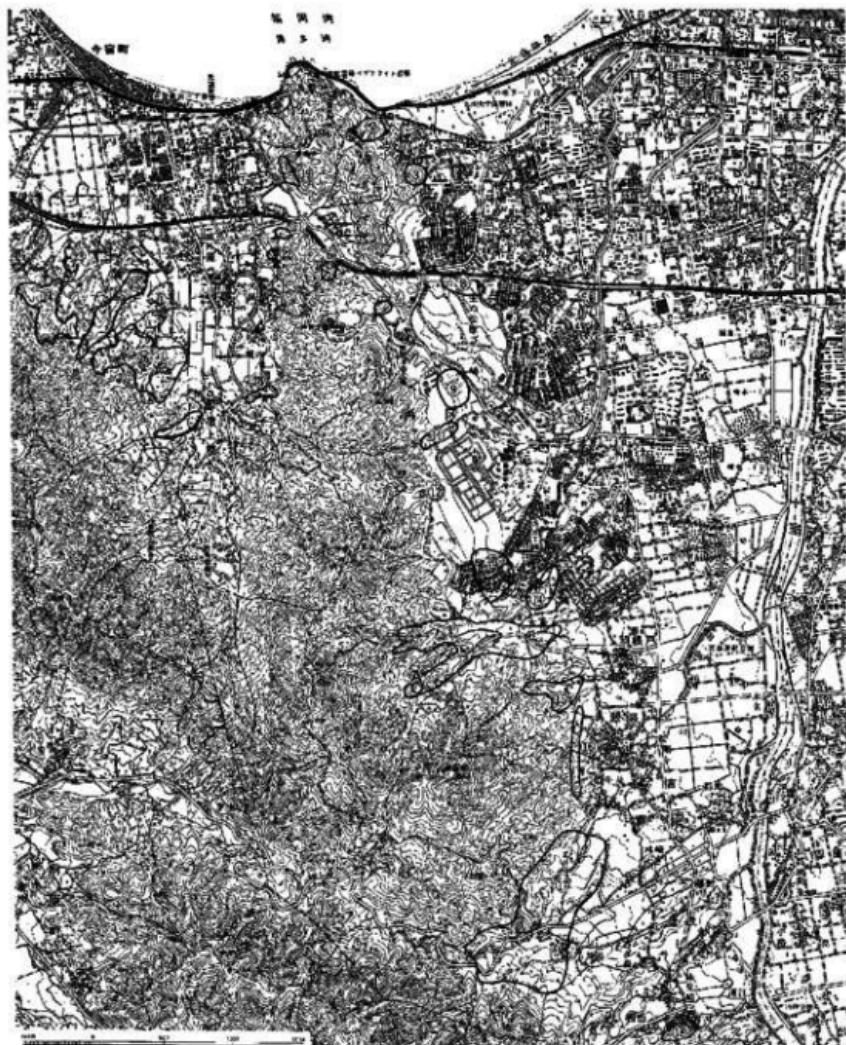


Fig. 3 調査風景



Fig. 4 調査地遠景

羽根戸古墳群2



- | | | | | |
|-------------|---------------|-------------|--------------|-----------|
| A 羽根戸古墳群 Q群 | 6. 広石南古墳群 A群 | 12. 並天竹古墳群 | 18. 西山古墳群 | 24. 新開古墳群 |
| 1. 羽根戸古墳群 | 7. 広石東古墳群 B群 | 13. 對方古墳群 | 19. 油坂古墳群 A群 | 25. 谷上古墳群 |
| 2. 長塗山古墳群 | 8. 高崎古墳群 I群 | 14. 野方駄進古墳群 | 20. 油坂古墳群 B群 | 26. 相原古墳群 |
| 3. 草場古墳群 | 9. 広石古墳群 | 15. 羽根戸南古墳群 | 21. 鶴崎古墳群 A群 | 27. 本村古墳群 |
| 4. 草場古墳群 | 10. コノリ古墳群 | 16. 原蓋古墳群 | 22. 鶴崎古墳群 B群 | 28. 烧山古墳群 |
| 5. 五島山古墳群 | 11. 広石古墳群 VI群 | 17. 余武古墳群 | 23. 新開古墳群 F群 | |

Fig. 5 周辺遺跡分布図 (縮尺 1/40,000)

第2章 遺跡の位置と歴史的環境

1. 遺跡の位置と立地

福岡市の中北部、博多湾を囲むように位置する平坦地を一般的に福岡平野と呼んでいるが、地形的には丘陵等によって画され、いくつかの平野の集合体である。この福岡平野の西部を占めるのが早良平野である。早良平野は、平野の中央を北流する室見川とその水系を成す小河川によって形成された沖積平野で、扇型を成す地形の弧長4km、奥行き11kmを測る。早良平野は、西辺を脊振山・飯盛山・長垂山、東辺を油山から派生した丘陵によって画される。

本報告書で述べる羽根戸古墳群Q群は、この早良平野の西辺を画す山塊のひとつである、飯盛山（標高382m）から東に派生した丘陵上に位置する。本古墳群を構成する1～5号墳は、早良平野の西部中央、平野の西辺を画す飯盛山山麓の谷部に位置し、飯盛山から派生する標高145～160m前後の丘陵斜面に立地する。本古墳群から現海岸線までは約4km、早良平野の丘陵裾部まで約1kmをそれぞれ測る距離にある。

2. 遺跡の歴史的環境

本古墳群を含む早良平野西辺部における歴史的環境は、これまで既刊の報告書に詳細に言及し尽くされているので、本文末に関係文献を列記してこれに譲り、ここでは本調査地周辺に限定して歴史的環境を概観して見ることにする。

本古墳群が立地し、早良平野の西辺部を画す西山・叶岳・飯盛山山麓には扇状地形が発達し、各時代の遺跡が数多く発見されている。

縄文時代の遺跡としては、これまでに明確な遺構を伴う遺跡は発見されていないが、遺物は数ヶ所から出土している。

弥生時代の遺跡としては、吉武高木遺跡・十郎川遺跡・野方中原遺跡・捨六町ツイジ遺跡・野方久保遺跡などがあげられよう。これらの遺跡の性格を見ると、弥生時代初めから古墳群周辺地域において、人々が田を築き、漁（獵）を行ってクニを営み、あるときは戦いを余儀なくされたようである。

古墳時代には、前期～中期において高祖山から派生した丘陵端部には今宿大塚古墳・丸隈山古墳・鋤崎古墳や、油山から派生した低丘陵には梅林古墳などの前方後円墳が、後期には早良平野を画す飯盛山・叶岳から開析する低丘陵地帯に羽根戸古墳群・広石古墳群・金武古墳群等を始めとして多くの群衆墳が築造されている。また、直接製鉄に關係する遺構は見つかっていないが、鉄鐸が丘陵の広範囲な地点から出土している。このことは、古墳の石室から鉄鐸が出土していることと併せて考えると、古墳時代後期の周辺地域の性格を考える上で一つの指針を示していると言えよう。

第3章 調査の記録

1. 遺跡の概要

羽根戸古墳群は、早良平野を西す山々の一つの飯盛山（標高382m）から開析され派生した丘陵上に位置し、6世紀～7世紀前半に造営された約140基の古墳から構成される。これまで調査を実施した古墳はすべて円墳で、主体部には横穴式石室を有する。約140基の古墳は、標高52～160mの山麓に分布し、古墳が造られた位置の関係から17の群に分かれ、A～Q群の名称が付けられている。

調査を実施したQ群は、1989年に発見された古墳群で、羽根戸古墳群中では最も谷の深部に位置する。古墳群は、1～5号の5基の円墳から構成され、最も標高の高い地点、標高145～160mを測る丘陵の南斜面に築造されている。5基の古墳は、既に調査前から石室の一部が開口し（図版6・7・8）、盃掘により玄室内は荒らされ、葬送時の状態を保っていなかった。古墳は全て、墳丘は円形、埋葬主体部は横穴式石室である。

1号墳は、主体部に単室の両袖型横穴式石室を有する円墳である。主体部の石室は、丘陵尾根筋に直行するように築造され、南東に開口している。墓道の全てと羨道・埴丘の一部は後世の削平により消失し、石室内部は擾乱を受けていた。石室の確認調査のために、石室規模や追葬の有無、築造年代などは不明。

2号墳は、1号墳の北東10mに位置し、主体部に単室の両袖型横穴式石室を有する円墳である。主体部の石室は、丘陵尾根筋に直行するように築造され、南東に開口している。墓道の全てと羨道・埴丘の一部は後世の削平により消失し、石室内部は擾乱を受けていた。石室の確認調査のため、石室規模や追葬の有無、築造年代などは不明。

3号墳は、4号墳の北西10mに位置し、主体部には単室の両袖型横穴式石室を有し、墳径約9mを測る円墳である。主体部の石室は、丘陵尾根筋に直行するように築造され、南東に開口している。墓道の全てと羨道・埴丘の一部は後世の削平により消失し、石室内部は擾乱を受けていた。

4号墳は、3号墳と5号墳との間に位置し、主体部に単室の両袖型横穴式石室を有し、墳径約5mを測る円墳である。主体部の石室は、丘陵尾根筋に直行するように築造され、南東に開口している。石室の天井部、墓道の全てと羨道・埴丘の一部は後世の削平により消失し、玄室の規模から小児用と考えられる。

5号墳は、4号墳の北東10mに位置し、主体部に単室の両袖型横穴式石室を有し、墳径約10mを測る円墳である。主体部の石室は、丘陵尾根筋に直行するように築造され、南に開口している。墓道の全てと羨道・埴丘の一部は後世の削平により消失し、石室内部は擾乱を受けていた。

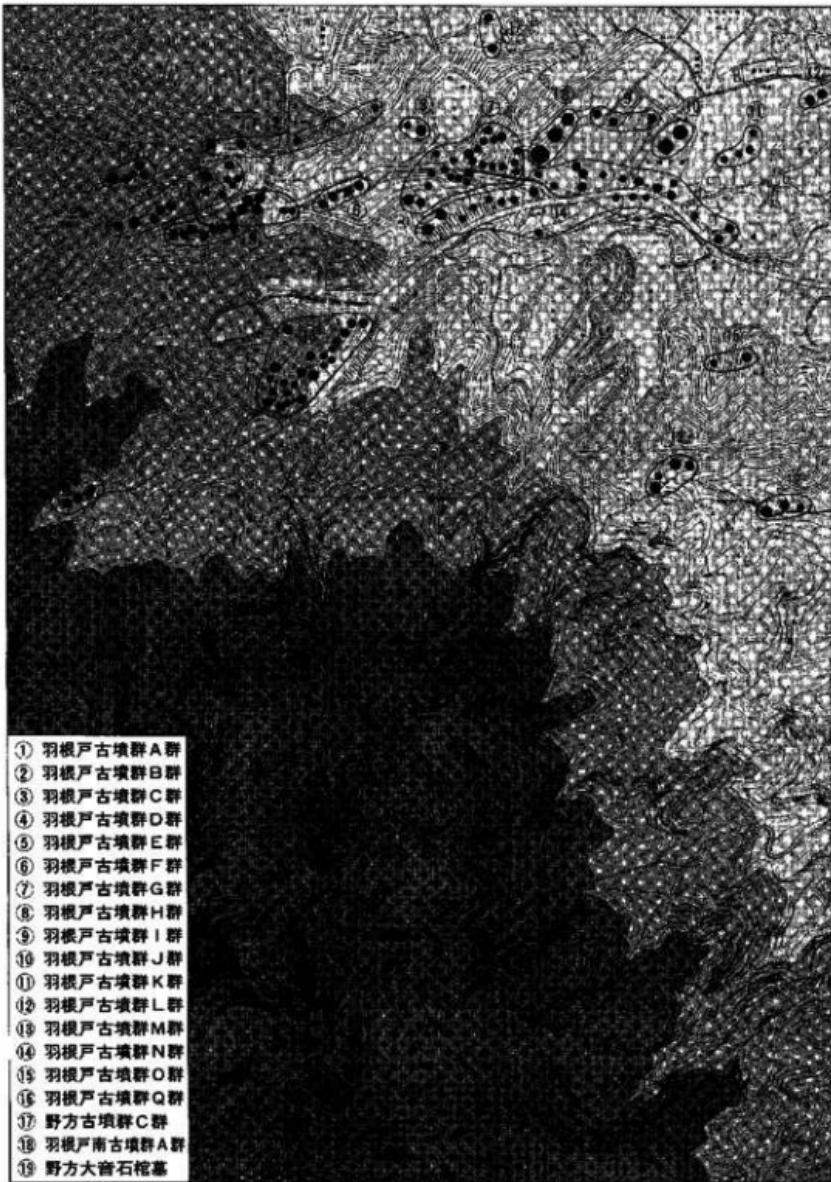


Fig. 6 古墳群分布図 (縮尺 1/7,500)

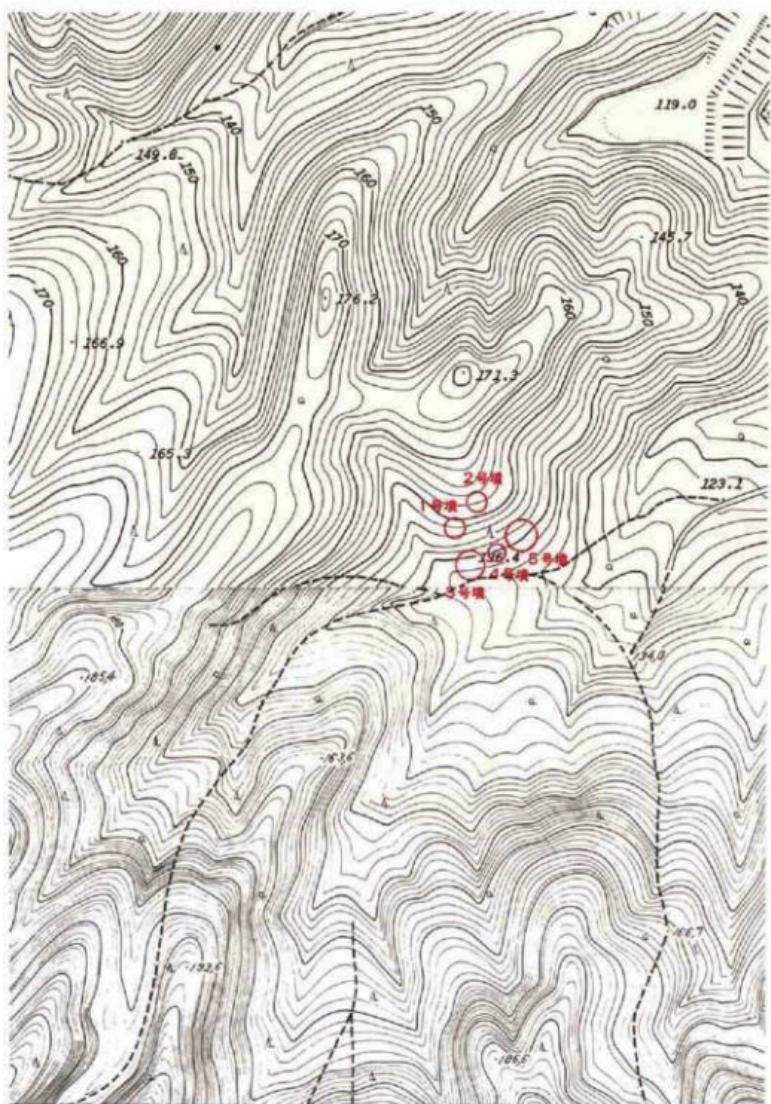


Fig. 7 周辺地形図 (縮尺 1/2,500)

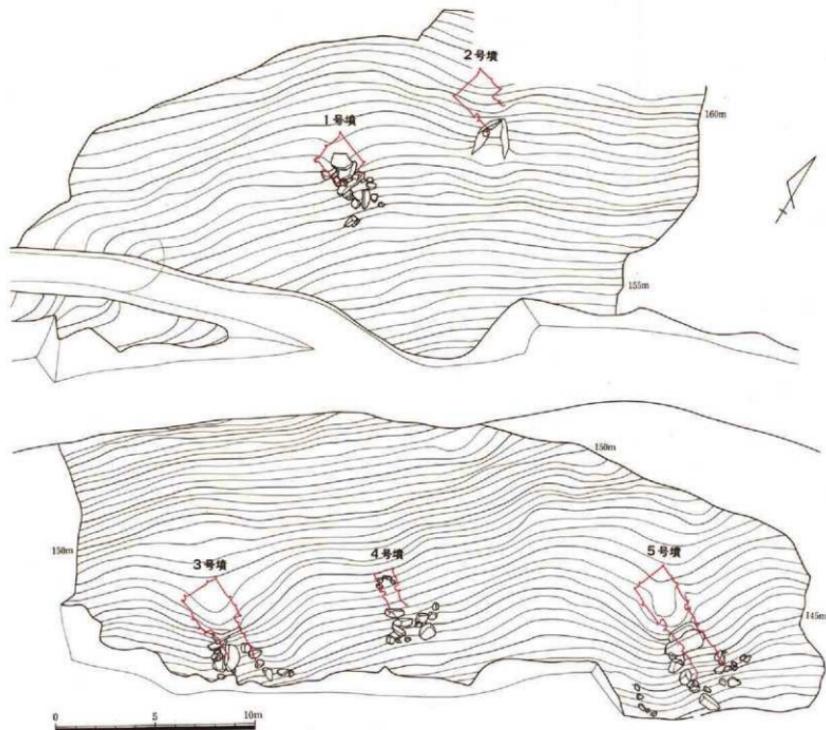


Fig. 8 古墳群現況図 (縮尺 1 /200)

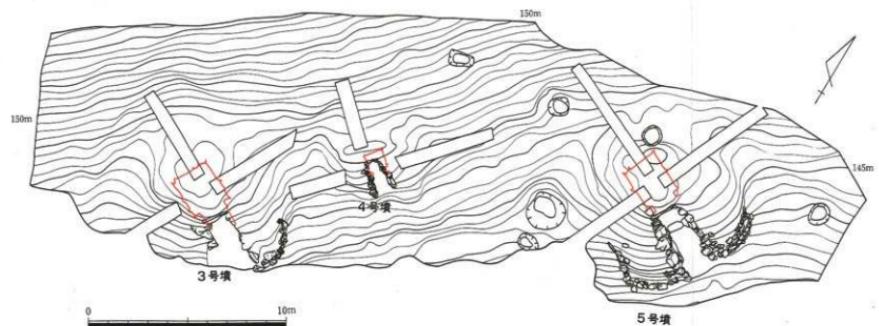


Fig. 9 古墳群墳丘遺存図（縮尺 1 / 200）

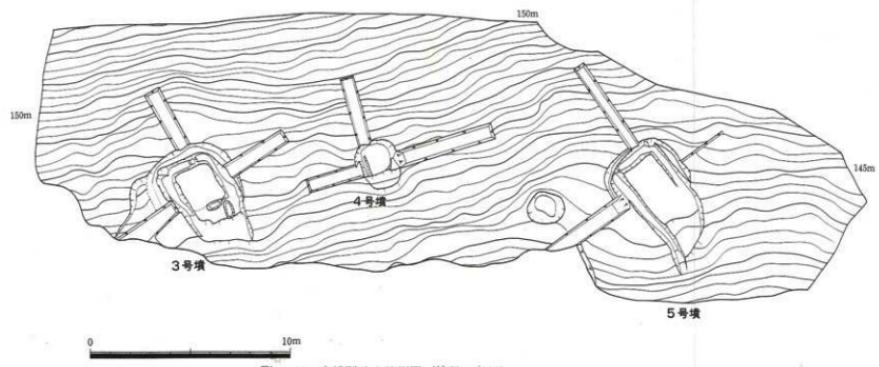


Fig. 10 古墳群地山整形図（縮尺 1 / 200）

羽根戸古墳群Q群

古墳名	古墳数	墳 形	主 体 部	標 高	備 考
A群	5	円墳	横穴式石室	110~125m	
B群	4	円墳	横穴式石室	80~100m	
C群	2	円墳	横穴式石室	75m	
D群	1 2	円墳	横穴式石室	95~120m	
E群	1 4	円墳	横穴式石室	90~110m	2基が消滅
F群	4	円墳	横穴式石室	85~90m	
G群	2 4	円墳	横穴式石室	75~95m	
H群	3	円墳	横穴式石室	70m	
I群	3	円墳	横穴式石室	60~65m	全て消滅
J群	2	円墳	横穴式石室	58~59m	
K群	4	円墳	横穴式石室	52~55m	
L群	5	円墳	横穴式石室	40~50m	
M群	2 2	円墳	横穴式石室	90~115m	
N群	2 8	円墳	横穴式石室	52~95m	1/3の古墳が消滅
O群	2	円墳	横穴式石室	66~66m	
P群	2	円墳	横穴式石室	70~73m	
Q群	5	円墳	横穴式石室	145~160m	3基が消滅
17群	1 4 1				

第1表 羽根戸古墳群一覧

2. 1号墳

位置と現状 (Fig. 8 図版7, 8)

1号墳は、2号墳とともに、5基の古墳から構成される古墳Q群が位置する丘陵斜面において他の古墳より15m高い斜面（標高160m）に位置する。墳丘は、埋没、削平を受け、僅かに高まりを残す。墳丘の南東部には、人が出入りできる程の大きさの穴が開口し、玄室の天井石が露呈していた。

地山整形

本墳は丘陵尾根筋に直行する位置関係、すなわち斜面等高線にはば直行して石室を築造している。しかし、調査が石室の確認に限定されていたために、古墳築造のための地山整形の規模や周溝などは不明。

横穴式石室 (Fig. 11 図版8)

本墳の主体部は玄室主軸をW-68°-Nにとり、南東方向に開口、すなわち谷部に向かって開口する単室の両袖型横穴式石室である。後道および閉塞施設については不明。玄室は、前・奥壁幅とも1.7m、左壁長1.6m、右壁長1.8mを測り、ほぼ正方形の平面形を呈する。

出土遺物

1号墳玄室からは、鉄器の鋤先、小刀が出土した。

鉄器 (Fig. 12 図版38)

鋤先 (101) U字形をなし、断面形はY字形を呈する。基部幅、長さとも16.5cm。

小刀 (102) 刃部のみで全形は不明。幅2.8cm、厚さ0.5cm。

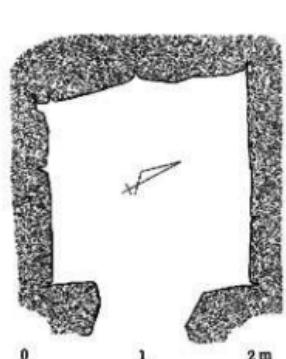


Fig. 11 1号墳玄室実測図 (縮尺1/50)

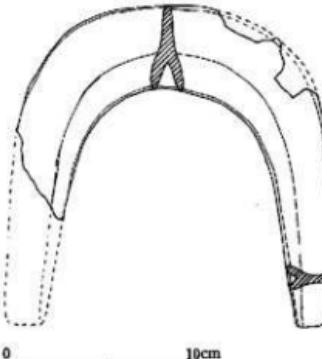


Fig. 12 1号墳出土遺物 (縮尺1/3)

3. 2号墳

位置と現状 (Fig. 8 図版7, 8)

2号墳は、1号墳とともに、5基の古墳から構成される古墳Q群が位置する丘陵斜面において他の古墳より15m高い斜面(標高160m)に位置する。墳丘は、埋没、削平を受け、僅かに高まりを残す。墳丘の南東部には、人が出入りできる程の大きさの穴が開口し、玄室の大井石が露呈していた。

地山整形

本墳は丘陵地根筋に直行する位置関係、すなわち斜面等高線にはば直行して石室を築造している。しかし、調査が石室の確認に限定されていたために、古墳築造のための地山整形の規模や周溝などは不明。

横穴式石室 (Fig. 13 図版8)

本墳の主体部は玄室主軸をW-78°-Nにとり、南東方向に開口、すなわち谷部に向かって開口する。単室の両袖型横穴式石室であるが、限りなく片袖型横穴式石室を意識したものであろう。狭道および閉塞施設については不明。玄室は、前・奥壁幅とも1.9m、左右壁長1.3mを測り、長方形の平面形を呈する。

出土遺物

2号墳玄室からは、耳飾り、小刀が出土した。

装身具 (Fig. 14 図版38)

耳 飾 (201) 青銅地金銅張りの耳飾りである。直径1.6cmの円形をなし、断面も直径が0.5cmの円形。1点だけ出土した。

鉄 器 (図版38)

小 刀 (202) 基端部と刃先を欠き全形は不明。

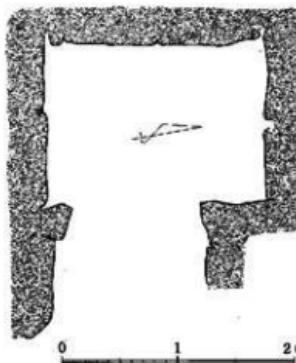


Fig. 13 2号墳玄室実測図 (縮尺1/50)



Fig. 14 2号墳出土遺物 (縮尺2/3)

4. 3号墳

位置と現状 (Fig. 8 図版6, 7, 8)

古墳群を構成する5基の古墳の内で3～5号墳は、標高150m前後の等高線に沿うように位置する。最も西（山奥部）に位置する3号墳は、墳丘が2m程の高まりを僅かに示していたが、大半は埋没していた。墳丘の南東部では一部が削平を受けて欠失し、篠道、墓道も欠失していた。墳丘の南東側には人が出入りできる程の穴が開口し、玄室の天井石が露出していた。

地山整形 (Fig. 10 図版20)

本墳は丘陵尾根筋に直行する位置関係、すなわち斜面等高線には直行して石室を築造している。したがって、古墳築造のための地山整形は、丘陵斜面側の周溝の掘削と周溝の内側、すなわち墳丘基底面の整地という作業からなる。丘陵側の周溝の掘削は、古くに開削されて平坦になっているために、地山整形の上端部は不明である。そのために、周溝は残存していない。しかし、かなり大規模な地山整形が行われたことがうかがえる。

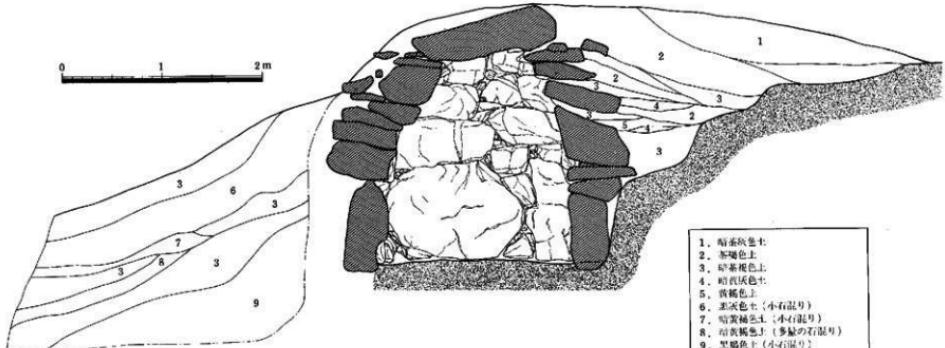
墳丘 (Fig. 9, 17 図版12, 14, 18)

本墳は後世の削平により、墳丘の東部、及び頂部が欠失して古墳築造時の姿を残していないが、残存する墳丘から造當時の規模・築造技法を十分に復原することは可能である。墳丘の造残高は、基底面から0.8m、玄室床面から2.6mをそれぞれ測る。墳丘規模はトレーナーにおける封土の状況から、直径8～9m・墳高3～4mの規模が想定される。墳丘の封土は第一義的には古墳の外形を形成するものであるが、性格的には壁石の安定を目的とするものと、墳丘の成形を目的とするものとに大別される。本墳においても同様な事例が認められる。さらに壁石の安定を目的とする封土上も、ほぼ古墳基底面を境にして二つに分類される。すなわち、古墳基底面より低い部分である石室掘方内における壁石（腰石）の裏込めの場合は、深さ1.5mにわたって層厚10cm程の暗茶褐色粘質土を連続して突き固めている。これに対して古墳基底面より上部の墳丘は、Fig. 15に示すように層厚5～20cm程を測る封土が雑然と置かれて形成されている。この墳丘封土の異なりは、石室の腰石を安定させることに力が注がれていたことを示すと共に、古墳築造のポイントが腰石の据付けにあることを示していると言える。

外護石列 (Fig. 17 図版9～11, 14)

篠道壁端から墳丘の裾にかけて外護石列が配されている。長さ3.5m、高さ1mにかけて0.3m×0.3m～0.8m×0.8m重する転石を3段～5段で積み上げている。墳丘の崩壊を防ぐことを目的としたものであろう。南西端部は工事で壊されていて不明。

L=149m



L=149m

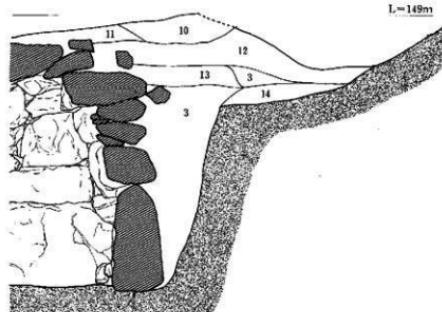


Fig. 15 3号墳墳丘土層図(縮尺1/40)

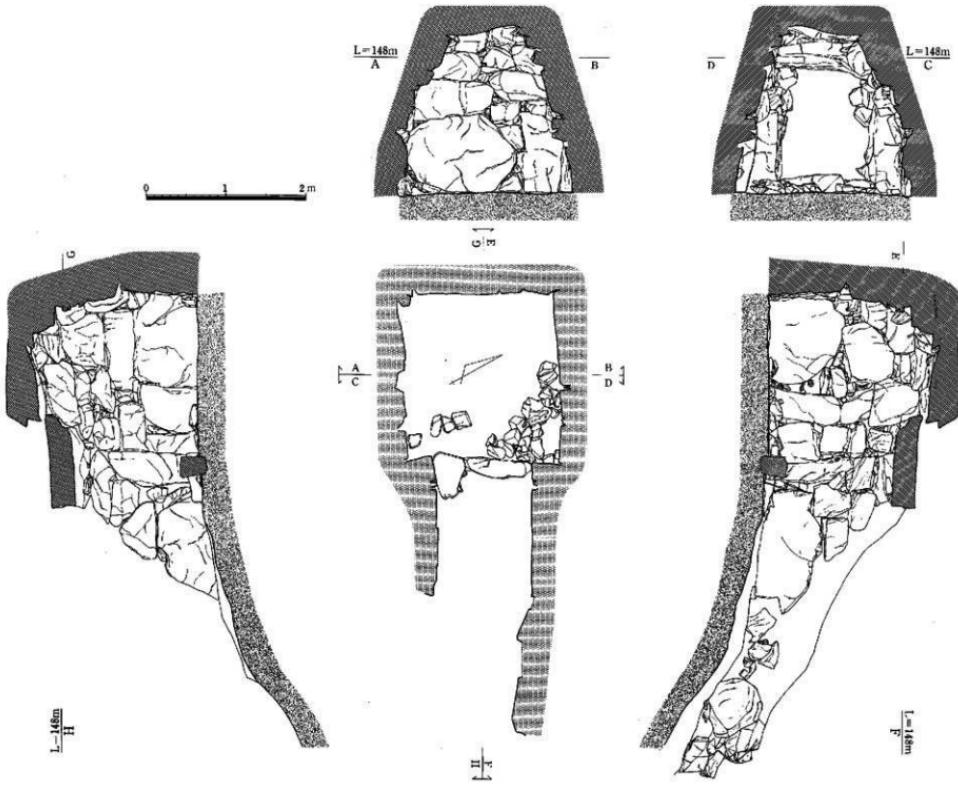


Fig. 16 3号填石室实测图 (缩尺 1/50)

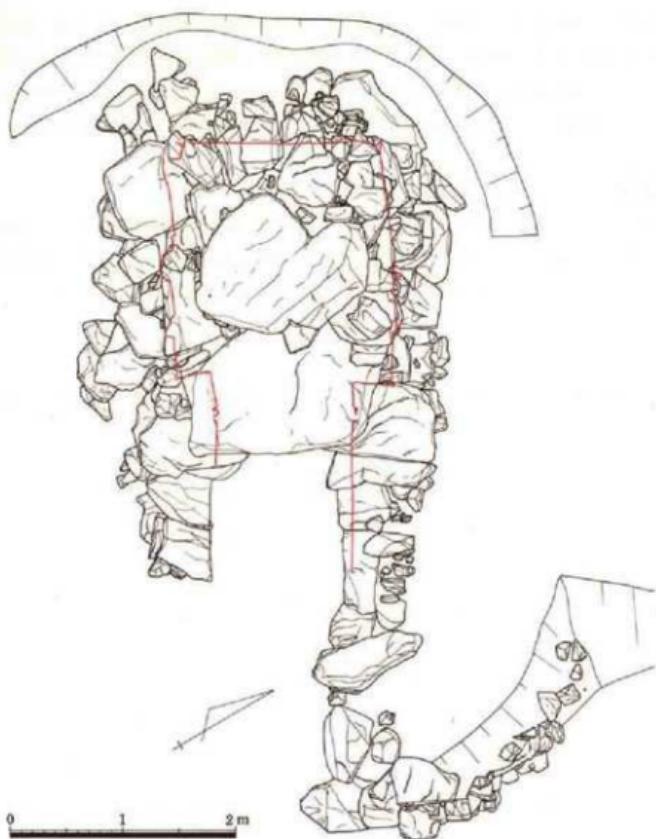


Fig. 17 3号墳石室・外護列石実測図 (縮尺 1/50)

横穴式石室 (Fig. 16, 17, 18 図版19, 20)

本墳の主体部は玄室主軸をW-61°-Nにとり、南東方向に開口、すなわち谷部に向かって開口する单室の両袖型横穴式石室である。石室は羨道部天井が一部欠失しているが、保存状態は比較的良好である。調査では、玄室、羨道および閉塞施設の一部を検出した。玄室および羨道の一部は流土・落石によって埋没し、玄室に至ってはさらに盗掘等を受けて床面の敷石に至る程の搅乱を受けていた。石室は、正方形プランの玄室と主軸を玄室とほぼ同じくする羨道との連接からなり、深い掘方内に構築されている。石室全長は、右側壁で5.5m、左側壁で3.3mを測る。羨道の床面は、1ヶ所に樋石が配されている。閉塞施設は羨道前部に位置する。

石室掘方 (Fig. 10 図版20)

石室掘方は、ほぼ垂直に掘削が行われ、深さ1.8mを測る。平面形は長方形を呈し、幅4.2m・長さ6mを測る。掘方の底、すなわち墓壇基底面の壁際には、幅40cm前後を測る溝状の凹みが掘られている。これは、石室の腰石を安定して据え付けるために掘削したものである。

玄室 (Fig. 16 図版15, 16, 17)

玄室は、奥壁幅1.9m、前幅1.9m、左右壁長2.1m、天井高2.0mを測り、正方形の平面形を呈する。奥壁は1.5m×1.0mの転石を、両壁は1m×1.2m前後の転石をそれぞれ中心にして配して腰石としている。腰石は、石室掘方基底面の壁沿いに掘られた溝状の凹みに据え付けている。玄室構築の石積みは、奥壁は4段、右・左壁は4~5段からなる。石積みの方法、すなわち石の使い方は大きく三つに分かれる。腰石を含む下段では広口積み、中段では横口積み、天井石近くの上段では小口積みがそれぞれ用いられ、総じて石積みの目地は直線を成していない。玄室の天井石は1.5m×1.3mを測る1個の転石からなる。玄室床面の一部には、20cm×20cm~40cm×40cmほどの大きさの扁平な石を用いた敷石が認められる。石敷きの残存は均一ではなく、搅乱によるものであろう。本来は、床面全面に敷かれていたものであろう。

羨道 (Fig. 16 図版14, 15)

天井石および腰石上部の積石を人半欠失する。幅は玄門で1.2m測り、側壁は右側壁長3.5m、左側壁長1.7m残存する。高さは1.6mを測る。壁の石積みは、右側壁では1m×1.6m~0.8m×0.8mの転石を、左側壁では1.5m×0.8m前後の転石を用いて腰石とし、その上部に2~3段の石積みを行っている。天井石は玄門部を含む1個が残存するが、羨道壁の状況から築造時には2個もしくは3個で構成されていたと考えられる。樋石は、玄門の位置に二石が配されている。羨道床面は、樋石から1m程は玄室床面と同じ高さを呈するものの、緩やかな傾斜をもって羨道に移行する。



Fig. 18 3号墳石室実測図 (縮尺1/50)

閉塞施設 (Fig. 19 図版13)

玄門から後道部端側へ0.8mに位置する。人頭大の転石を積み上げて閉塞するもので、現存高0.7mであるが、本来は人井石との間を完全に密封していたものであろう。墓道側からは雑然とした石積みであるが、内側では階段状を成すものの整然とした石積みである。

墓道

墓道は、古墳の南東部側が工事で壊されていて不明である。

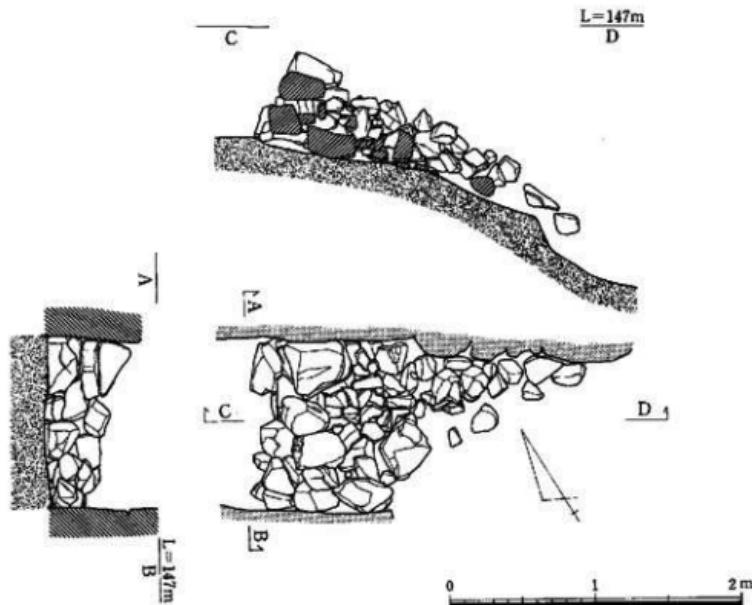


Fig. 19 3号墳閉塞施設実測図 (縮尺1/40)

出土遺物

3号墳からは、須恵器、小刀、耳飾が出土した。302, 310は玄室、その他は羨道より出土。

須恵器 (Fig. 21 図版38, 44)

蓋 A (301) 外面の2/3はヘラ削り。焼け重みあり。

蓋 B (302, 303) 外面の2/3はヘラ削り。中央部に扁平なつまみがつく。

环 A (304, 305) 2点とも底部外面はヘラ切り。

环 B (306) 器壁は肉厚。高台は粘土紐の貼り付け。

高 环 (307) 环底部はヘラ削り。ヘラ記号あり。

装身具 (Fig. 20 図版38)

耳 飾 (310) 青銅地金銅張りの耳飾りである。直径2.2cmの円形をなし、断面は椿円形を呈し、長軸0.8cm、短軸0.5cmを測る。1点のみ出土した。

鉄 器 (Fig. 12 図版38)

小 刀 (308, 309) 2点が出土しているが、2点とも刀身もしくは茎を欠き、全形は不明。



Fig. 20 3号墳出土遺物 (縮尺 2 / 3)

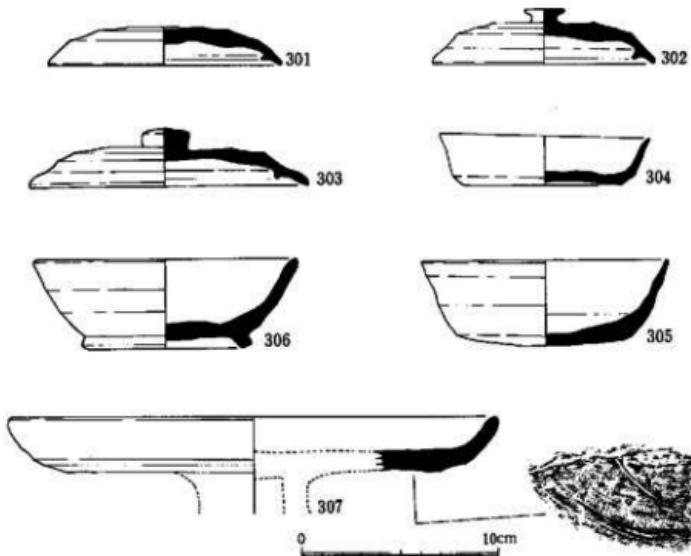


Fig. 21 3号墳出土遺物 (縮尺 1 / 3)

5. 4号墳

位置と現状 (Fig. 8 図版7, 21)

古墳群を構成する5基の古墳の中で、1・2号墳と3～5号墳は、それぞれ2本の直線が並行する位置関係にある。4号墳は、3号墳と5号墳との間に位置し、3号墳とは9m、5号墳とは14mの距離がある。4号墳の墳丘は僅かな高まりを残していたが、大半は埋没し、石室の石が露呈していなければ古墳とは思われない状態であった。玄室は、天井部を欠き、頂部が開口していた。図版21(1)に見られるように、1m前後の大きさを有する三つの転石が墳丘裾部に残存していた。これらは、石室の天井石として用いられた可能性が高い。

地山整形 (Fig. 10 図版25)

本墳は丘陵尾根筋に直行する位置関係、すなわち斜面等高線には直行して石室を築造している。したがって、古墳築造のための地山整形は、丘陵斜面側の周溝の掘削と周溝の内側、すなわち墳丘基底面の整地という作業からなる。

墳丘 (Fig. 9, 22 図版9, 21, 25)

本墳は後世の削平および自然流失により、墳丘の頂部を消失して古墳築造時の姿を残していないが、残存する墳丘から造営時の規模・築造技法を十分に復原することは可能である。墳丘の造営高は、基底面から0.8m、玄室床面から1.3mをそれぞれ測る。墳丘規模は南北トレンチにおける封土の状況から、直径5～6m、墳高2～2.5m規模が想定される。墳丘の封土は第一義的には古墳の外形を形成するものであるが、性格的には壁石の安定を目的とするものと、墳丘の成形を目的とするものとに大別される。本墳においても同様な事例が認められる。さらに壁石の安定を目的とする封土も、ほぼ古墳基底面を境にして二つに分類される。すなわち、古墳基底面より低い部分である石室掘方内における壁石(腰石)の裏込めの場合は、深さ0.6mにわたって緻密に上を連続して突き固めている。これに対して古墳基底面より上部の墳丘は、Fig. 24に示すように封土が雑然と置かれて形成されている。この墳丘封土の異なりは、石室の腰石を安定させることに力が注がれていたことを示すと共に、古墳築造のポイントが腰石の据付けにあることを示していると言える。

横穴式石室 (Fig. 23, 24 図版9～11, 24, 25)

本墳の主体部は玄室主軸をW-48°-Nにとり、南東方向に開口、すなわち谷部に向かって開口する単室の両袖型横穴式石室である。石室は、玄室、狭道の天井が欠失しているが、保存状態は比較的良好である。調査では、玄室、狭道および閉塞施設を検出した。玄室および狭道は

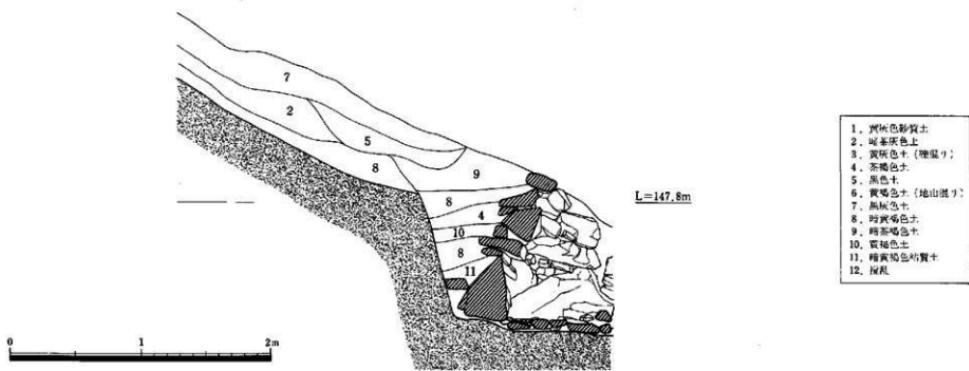
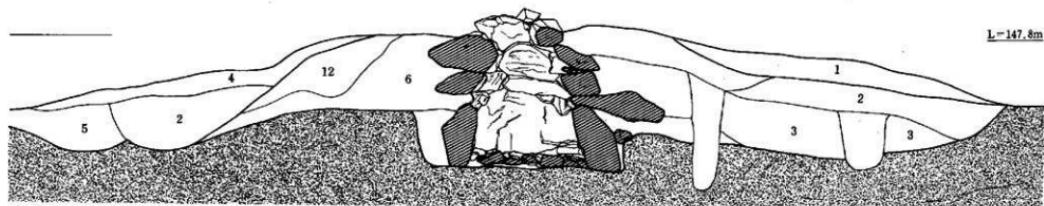


Fig. 22 4号墳墳丘土層図 (縮尺 1/30)

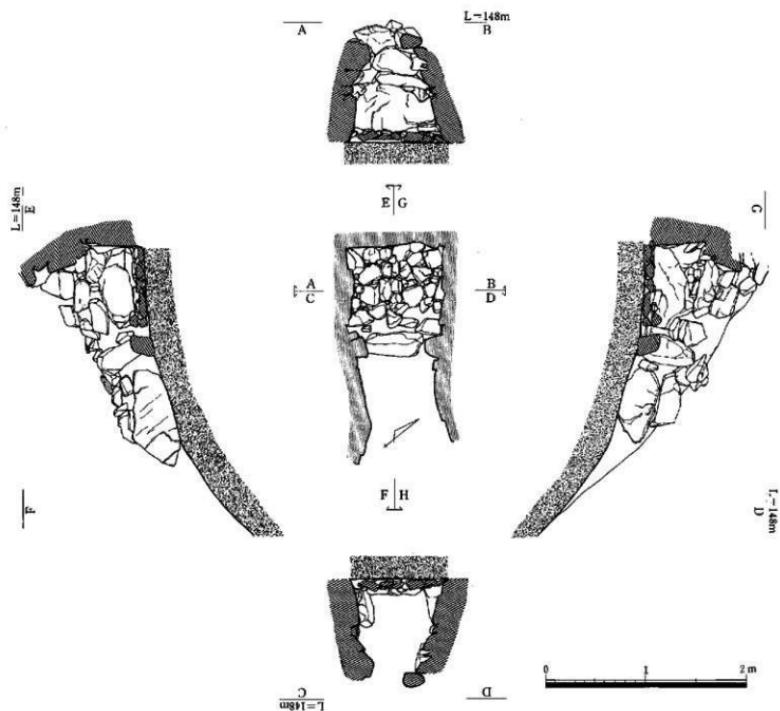


Fig. 23 4号填石室实测图 (缩尺 1/40)

流土・落石によって埋没していたが、盜掘による擾乱は受けていないようである。石室は、長方形プランの玄室と主軸を玄室とはほぼ同じくする羨道との連接からなり、比較的浅い掘方内に構築されている。石室全長は、右側壁で2m、左側壁で2.3mを測る。羨道の床面には、1ヶ所に樋石が配されている。閉塞施設は羨道前半部に位置する。

石室掘方 (Fig.10 図版25)

石室掘方は、ほぼ垂直に掘削が行われ、深さ0.5~1mを測る。平面形は長方形を呈し、幅2m・長さ2.5~3mを測る。掘り方の底、墓壙基底面の壁沿いには、幅30cm前後を測る溝状の凹みが部分的に掘られている。これは、石室の腰石を安定して据え付けるために掘削したものである。

玄室 (Fig.23 図版23)

玄室は、奥壁幅1m、前幅0.8m、左右壁長0.9m、天井高1.2m(推定値)を測り、正方形の平面形を呈する。奥壁は1m×0.8mの転石を、両壁は1m×0.6m前後の転石をそれぞれ1個だけ配して腰石としている。腰石は、石室掘方基底面の壁際に掘られた溝状の凹みに据え付けている。さらに、腰石と溝状の中央部側の壁との間に人頭大ほどの石を詰めて丁寧な根固めを

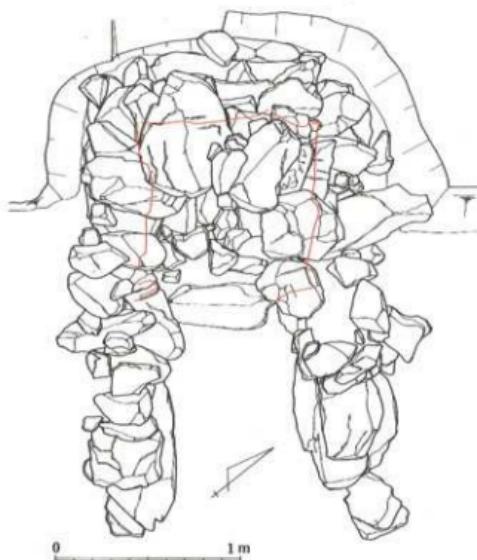


Fig. 24 4号墳石室実測図 (縮尺1/30)

を行っている。玄室構築の石積みは、奥壁は4段、右壁は5~7段、左壁は6~8段からなる。この段数の異なりは、用いられた石の大きさによる。石積みの方法、すなわち石の使い方は大きく三つに分かれる。腰石を含む下段では広口積み、中段では横口積み、天井石近くの上段では小口積みがそれぞれ用いられ、総じて石積みの目地は直線を成していない。玄室の天井石は欠失し不明。玄室床面には、台状に削り出された地山面に10cm×10cm~20cm×20cm程の大きさの扁平な石が敷かれている。

羨道 (Fig. 23 図版21,24)

天井石および腰石上部の積石は大半を欠失する。幅は玄門で0.7m、側壁は右側壁長0.8m、左側壁長1m残存する。高さは0.6mを測る。壁の石積みは、右側壁では0.8m×0.5mの転石を、左側壁では1m×0.5m前後の転石を用いて腰石とし、その上部には2段の石積みを行っている。天井石は残存しないが、羨道壁の状況から築造時には1個もしくは2個で構成されていたと考えられる。樋石は、玄門の位置に配されている。羨道床面は、樋石から直ちに緩やかな傾斜をもって墓道に移行する。

閉塞施設 (Fig. 25 図版22)

玄門の樋石より羨道端側へ0.4mに位置し、奥行き0.7m×高さ0.5mの規模を有する。人頭大的転石を積み上げて閉塞するもので、本来は天井石との間を完全に密封していたものであろう。墓道側からは雑然とした石積みであるが、内側では整然とした石積みである。

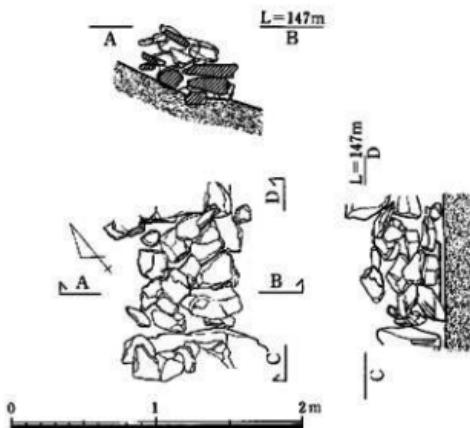


Fig. 25 4号墳閉塞施設実測図 (縮尺1/40)

出土遺物

4号墳からは、須恵器、土製模造品、鉄器が出土した。須恵器は玄室の右手前隅、鉄器は右奥隅からそれぞれ出土。土製模造品は墳丘の北西地区より出土。

須恵器 (Fig. 27 図版39)

蓋 A (401) 内面には、下方向に低いかえりが付く。402の蓋で出土した。

环 A (402, 403) 底部外面の調整技法は、402はヘラ削り、403はヘラ切り。402の底部外面にヘラ記号。

环 B (404) 底部外面の調整はヘラ削り。高台は外反する。

平 瓶 (405) 底部はヘラ切り。口縁は直立。

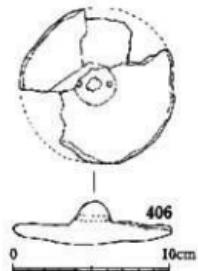


Fig. 26 4号墳出土遺物
(縮尺 1 / 2)

土製模造品 (Fig. 26 図版39)

鏡 (406) 墳丘中より出土した。直径 7 cm の円形をなす。全体的に鏡の特徴を表しており、表面の中央には紐を付け、裏面には反りを持たせている。

鉄 器 (Fig. 12 図版38)

鎌 先 (407) 全て破片で、全形は不明。断面形がY字形をなし、刃幅は4.8cmを測る。

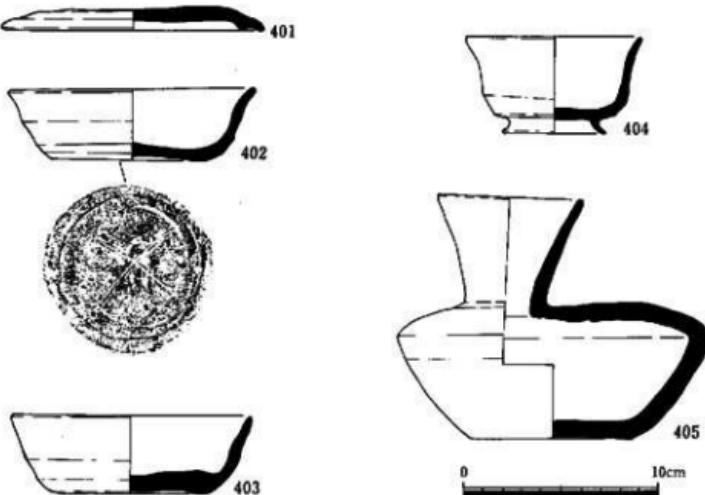


Fig. 27 4号墳出土遺物 (縮尺 1 / 3)

6. 5号墳

位置と現状 (Fig. 8 図版 7, 26)

古墳群を構成する5基の古墳の中で3~5号墳は、標高150m前後の等高線に沿うように位置する。最も東(山裾部)に位置する5号墳は、標高145mに位置する。墳丘が3m程の高まりを僅かに示していたが、大半は埋没していた。墳丘の南西部では一部が削平を受けて欠失している。墳丘の中央部南東側には人が出入りできる程の穴が開口し、天井石が露出していた。

地山整形 (Fig. 10 図版36)

本墳は丘陵尾根筋に直行する位置関係、すなわち斜面等高線には直行して石室を築造している。したがって、古墳築造のための地山整形は、丘陵斜面側の周溝の掘削と周溝の内側、すなわち墳丘基底面の整地という作業からなる。墳丘北西側の斜面の傾斜は急になっていることから、斜面の掘削が大規模に行われたことがうかがえる。

墳丘 (Fig. 9, 28 図版 9, 28, 31)

本墳は、古墳群の中では最も後世の削平が少なく、墳丘頂部の一部を欠失しているものの、古墳築造時の姿を良好に伝えている。したがって、残存する墳丘から造営時の規模・築造技法を十分に復原することは可能である。墳丘の遺残高は、基底面から1.5m、玄室床面から2.6mをそれぞれ測る。墳丘規模はトレンチにおける封土の状況から、直径10~12m、墳高4~5mの規模が想定される。墳丘の封土は第一義的には古墳の外形を形成するものであるが、性格的には壁石の安定を目的とするものと、墳丘の成形を目的とするものとに大別される。本墳においても同様な事例が認められる。さらに壁石の安定を目的とする封土も、ほぼ古墳基底面を塊にして二つに分類される。すなわち、古墳基底面より低い部分である石室掘方内における壁石(腰石)の裏込めの場合は、深さ1.6mにわたって層厚10cm程の暗黄灰色粘質土等を連続して突き固めている。これに対して古墳基底面より上部の墳丘は、Fig. 28に示すように層厚5~20cm程を測る封土が雑然と置かれて形成されている。この墳丘封土の異なりは、石室の腰石を安定させることに力が注がれていたことを示すと共に、古墳築造のポイントが腰石の据付けにあることを示していると言える。

外護石列 (Fig. 30 図版 9~11, 28, 32~34)

狭道壁端から墳丘の裾にかけて外護列石が配されている。長さ9m、高さ1mにかけて0.3m×0.3m~0.5m×0.6m重する転石を5段~6段で積み上げている。墳丘の崩壊を防ぐことを目的としたものであろう。

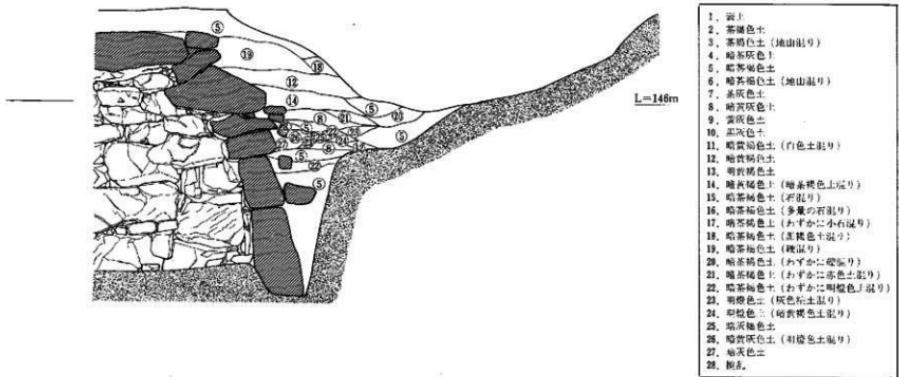
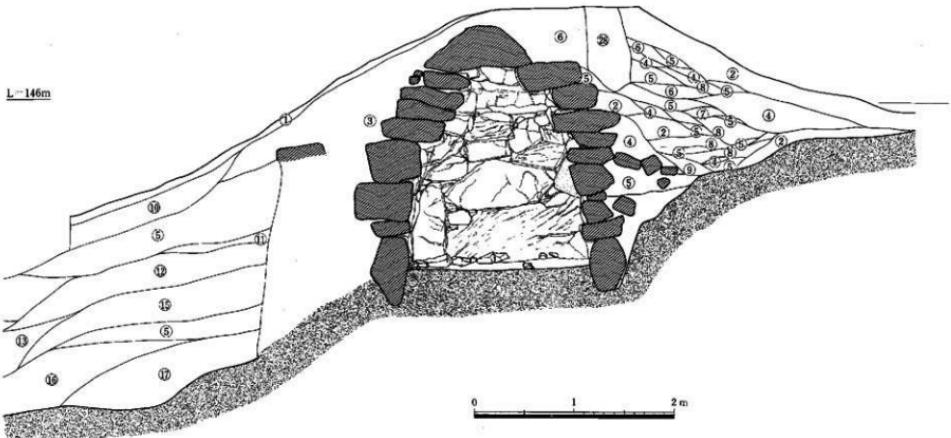


Fig. 28 5号墳埴丘土層図 (縮尺 1/40)

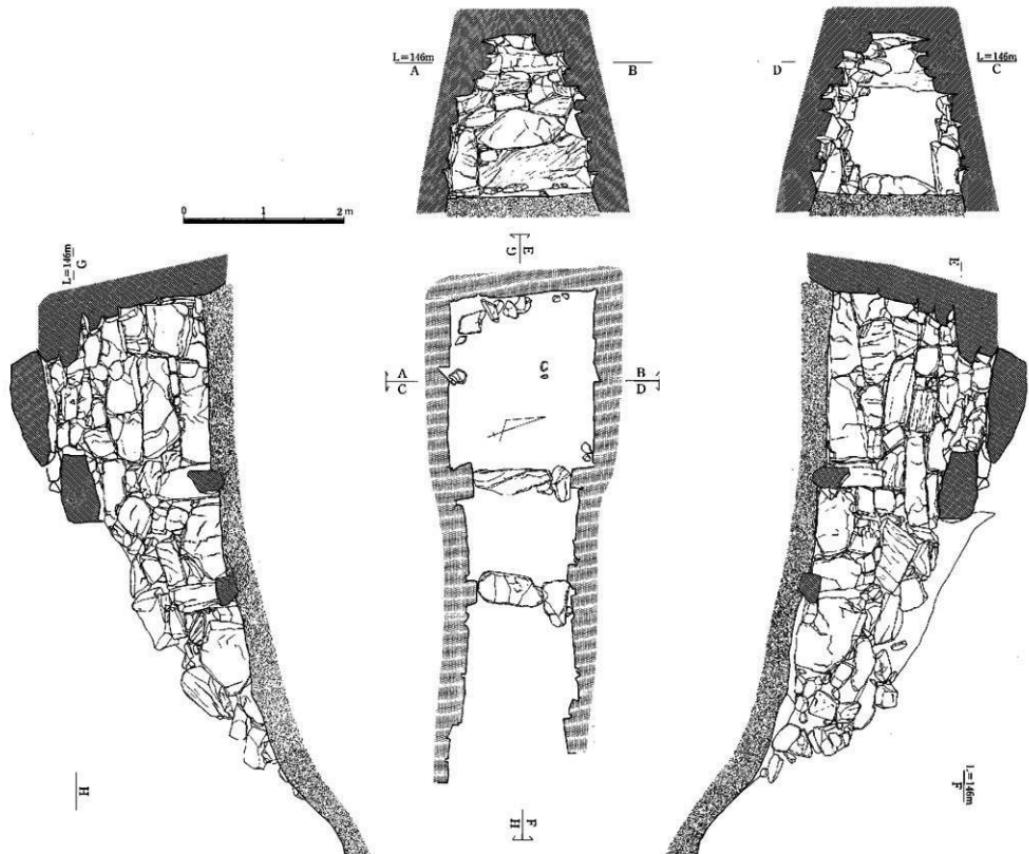


Fig. 29 5号填石室实测图 (缩尺1/50)

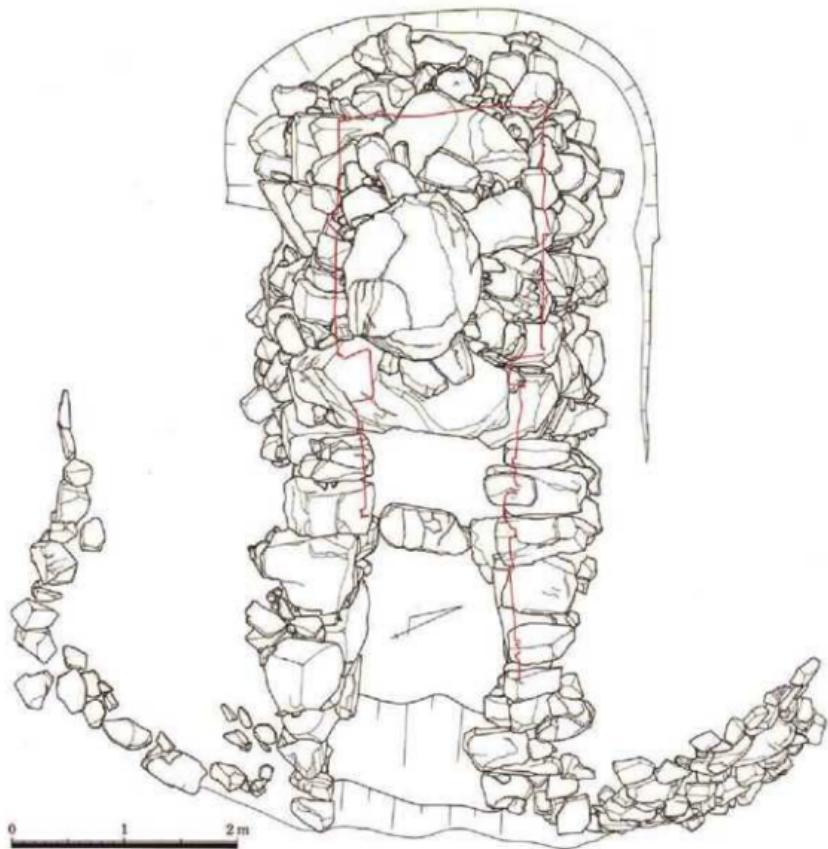


Fig. 30 5号墳石室・外護列石実測図（縮尺1/50）

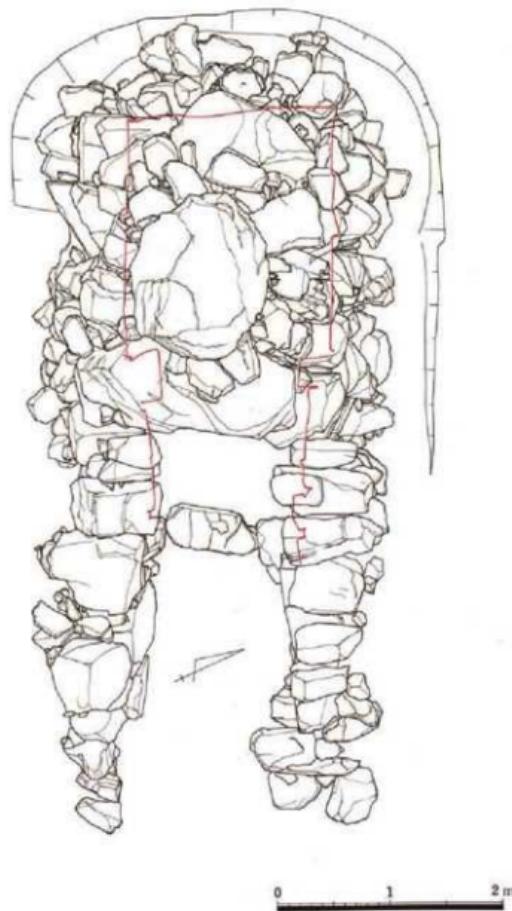


Fig. 31 5号墳石室実測図 (縮尺 1/50)

横穴式石室 (Fig.29~31 図版 9~11, 32~36)

本墳の主体部は玄室主軸をW-66°-Nにとり、南東方向に開口、すなわち谷部に向かって開口する単室の両袖型横穴式石室である。石室は羨道部天井が一部欠失しているが、保存状態は比較的良好である。調査では、玄室、羨道および閉塞施設の一部を検出した。玄室および羨道の一部は流土・落石によって埋没し、玄室に至ってはさらに盜掘等を受けて床面の敷石に至る程の搅乱を受けていた。石室は、正方形プランの玄室と主軸を玄室とは同じくする羨道との連接からなり、深い掘方内に構築されている。石室全長は、右側壁で6.1m、左側壁で6.4mを測る。羨道の床面は、2ヶ所に樋石が配されている。閉塞施設は羨道前半部に位置する。

石室掘方 (Fig.10 図版36)

石室掘方は、ほぼ垂直に掘削が行われ、深さ1.8mを測る。平面形は長方形を呈し、幅4.2m・長さ6mを測る。掘方の底、すなわち基壇基底面の壁際には、幅40cm前後を測る溝状の凹みが掘られている。これは、石室の腰石を安定して据え付けるために掘削したものである。

玄室 (Fig.29 図版29,30)

玄室は、奥壁幅1.8m、前幅1.8m、右壁長2.2m、左壁長2.1m、天井高2.0mを測り、ほぼ正方形の平面形を呈する。奥壁は1.5m×0.7mの転石を、両壁は0.6m×1.2m前後の転石を2個を配して腰石としている。腰石は、石室掘方基底面の壁沿いに掘られた溝状の凹みに据え付けている。玄室構築の石積みは、奥壁は5~6段、右・左壁は6~7段からなる。石積みの方法、すなわち石の使い方は大きく三つに分かれる。腰石を含む下段では広口積み、中段では横口積み、天井石近くの上段では小口積みがそれぞれ用いられ、総じて石積みの口地は直線を成していない。玄室の天井石は1.6m×1.2mを測る1個の転石からなる。玄室床面の一部には、20cm×20cm~40cm×40cmほどの大きさの扁平な石を用いた石敷が一部に残る。石敷きの残存は均一ではなく、搅乱によるものであろう。本来は、床面全面に敷かれていたものであろう。

羨道 (Fig.29 図版28,29)

天井石および腰石上部の積石の一部を欠失するが、遺存状態は良好である。幅は玄門で1.4m、羨道端近くで1.3mをそれぞれ測る。側壁は右側壁長4.1m、左側壁長4.3m残存する。高さは1.4mを測る。壁の石積みは、右側壁では1m×0.8mの転石を、左側壁では1m×0.6m前後の転石を用いて腰石とし、その上部に3~4段の石積みを行っている。天井石は玄門部を含む1個が残存するが、羨道壁の状況から築造時には3~4個で構成されていたと考えられる。樋石は、玄門から羨道端へ1.4mの位置に第一樋石、玄門の位置に第二樋石が配されている。第一樋石の位置する羨道壁の石は、他の壁の石積み方法と異なり、玄門石のように羨道中心線側に20cmほ

どうらせ石を立てている。これは、明らかに第一樋石と第二樋石との間を副室として意識的に築造した結果と言えよう。出土遺物も集中して出土していることは、副室であることを裏付けるものであろう。墓道床面は、第一樋石から緩やかな傾斜をもって墓道に移行する。

閉塞施設 (Fig. 32 図版27)

玄門から墓道部端側へ1.4mに位置する。人頭大の砾石を積み上げて閉塞するもので、現存高1mであるが、本来は天井石との間を完全に密封していたものであろう。墓道側からは雑然とした石積みであるが、内側では階段状を成すもの整然とした石積みである。

墓道

墓道は、古墳の南東部側が工事で壊されていて不明である。

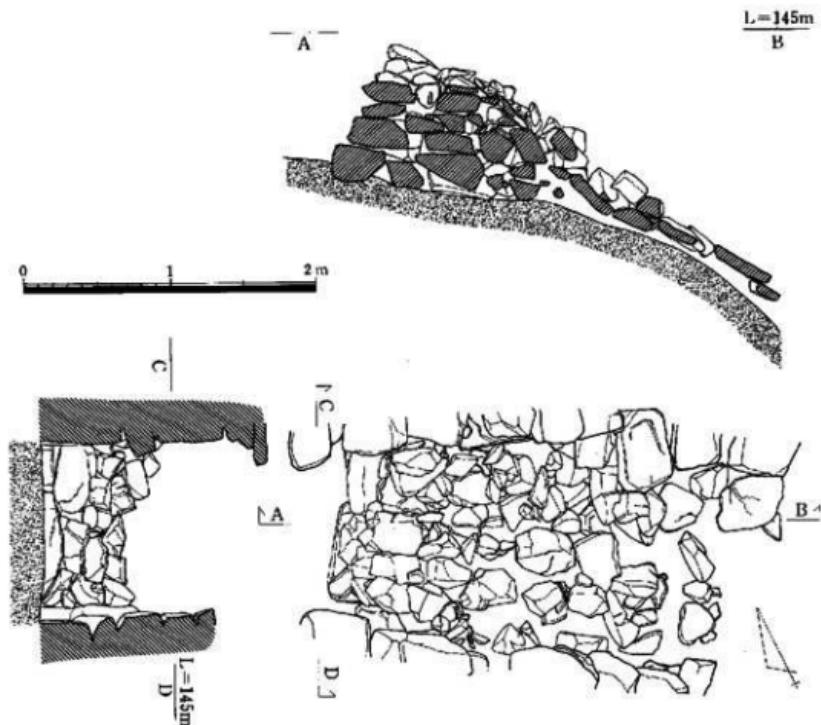


Fig. 32 5号墳閉塞施設実測図 (縮尺1/40)

遺物

5号墳から出土した遺物は、須恵器、鉄製武器、農具、装身具などである。出土量は土器がコンテナ13箱、その他の遺物が保存箱に3箱。5基ある古墳の中では、古墳中に残っていた遺物量が最も多い。遺物の出土地点は、表2に示すとおり、大半が玄室、副室である。一部の須恵器が、墓前である墳丘外護列石から出土している点は注目される。

須恵器 (Fig. 32~39 図版40~44)

蓋 A (501~519) 501、502、504、505は灰色~黄灰色を呈し、非常に軟質である。内面のかえりは下方に立ち上がる。502と504の外面には同一人物によって記されたと考えられるヘラ記号がある。他の蓋は、暗青灰色系を呈し硬質である。かえりも低く、わずかに形を成す。

蓋 B (520~523) 520は灰色~黄灰色を呈し、非常に軟質である。内面のかえりは下方に立ち上がる。外面はヘラ削り。中央には宝珠形のつまみが付く。521は518と同じ形態を示すが、暗青灰色系を呈し硬質である。522は器形が僅かに丸みを持つのに対し、523は平面的名形態を示す。それぞれ外面中央にはヘラ削り調整され、扁平なつまみが付く。内面のかえりは粘土紐で僅かに形作られる。

	玄室	副室	狭道	墳丘
蓋 A	501, 502, 503, 504, 505, 512, 513, 516	506, 508, 509, 510, 511, 515, 517	507, 514	
蓋 B	520, 521, 522	523		
環 A	525, 526, 527, 528, 529, 530, 531, 539	532, 533, 534, 535, 536, 537, 538, 540, 542	524	541
環 B		543		
高環	548, 550	546, 547, 549, 551, 552, 553	545	
短頸壺			544	
平瓶		555, 556		559
飴		558	560, 561, 562	
器台				554

第2表 5号墳出土須恵器出土地点一覧

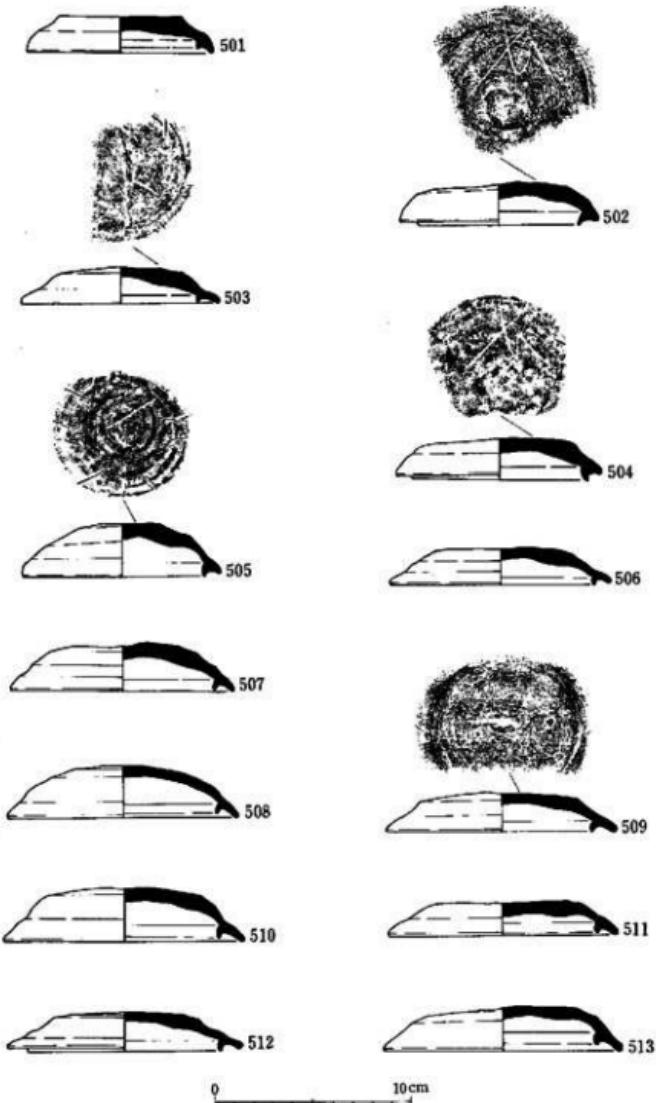


Fig. 33 5号墳出土遺物 (縮尺1/3)

环 A (524~542) 526、527は黄灰色を呈し、非常に軟質である。胎土、焼成の具合が蓋Aの502と504に近似する。口縁は直立ぎみである。底部外面には同一人物によって記されたと考えられるヘラ記号がある。2点とも底部外面はヘラ切り。524、525、528は、口径に対する器高の割合が他の环と比べて著しく高い。

环 B (543) 口縁はやや外反しながら直線的に立上り、端部は丸く仕上げる。器壁は肉厚。底部はヘラ削りの後に、粘土紐の高台を貼り付け。胎土、焼成、技法的に蓋Bの522とセットをなす要素が強い。

高 环 (545~553) 545~548のように口径が15cm未満の群と549~553のように口径が25cmを超える大型の群がある。大型の549~553中で550を除く高环は、黄灰色を呈し、非常に軟質である。环底部はヘラ削り。ヘラ記号あり。

短頸壺 (544) 544の体部は外に丸く張出し、口縁は短く直線的に立ち上がる。

平 瓶 (555, 556, 559) 555、556、559とも円筒形を作った後に粘土円盤で蓋をする。さらにその中央に穴を開け、別途作った口縁部を接合させている。

龜 (558, 560~562) 560、561は口縁部破片。562は徳利的形態を呈し、底部は平坦。

器 台 (554) 口縁部の破片で全形は不明。口縁は直線的に外反し、端部は面を持つ。内外面には櫛描きの波状文が施されている。

壺 前底部および墳丘外護列石から出土している。いずれも小破片で全形は不明。

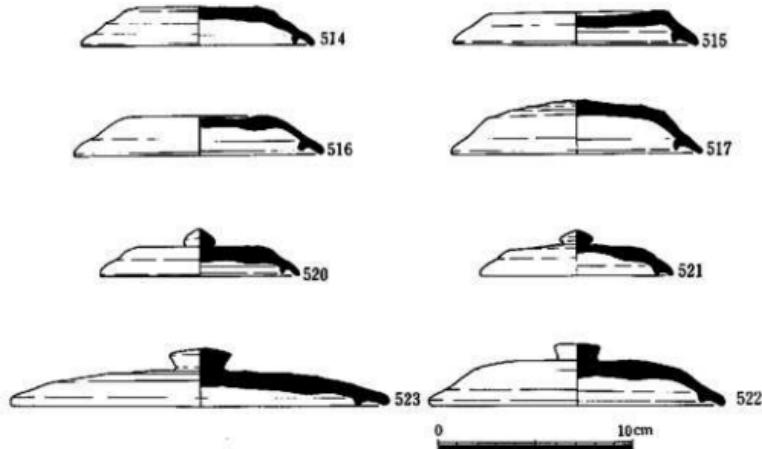


Fig. 34 5号墳出土物 (縮尺1/3)

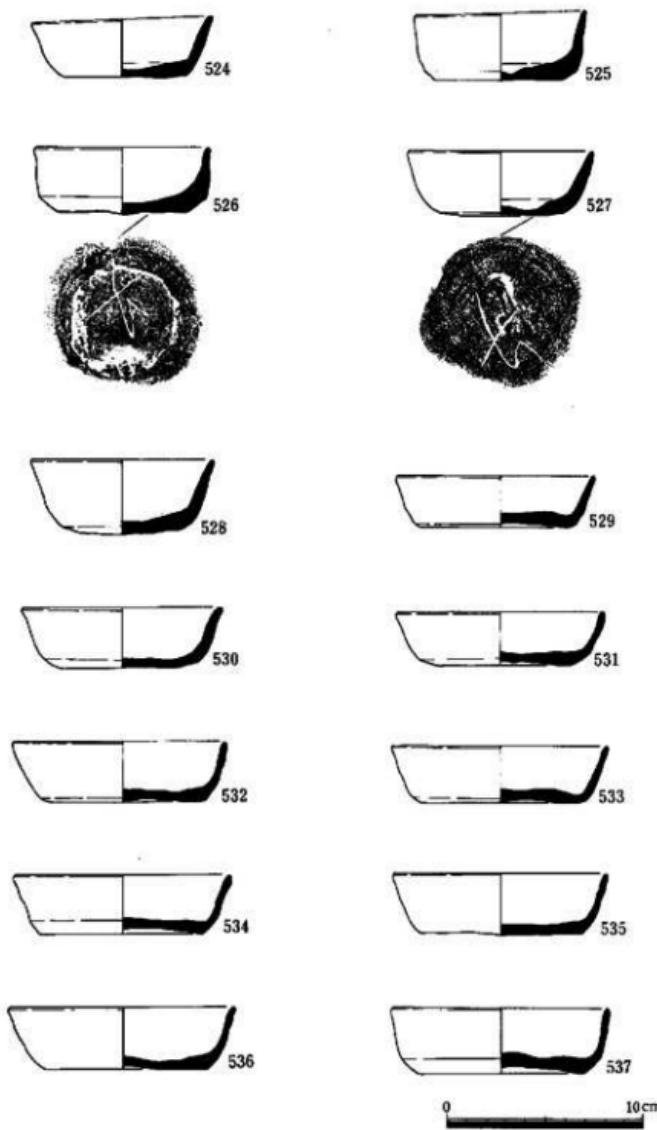


Fig. 35 5号墳出土遺物 (縮尺 1/3)

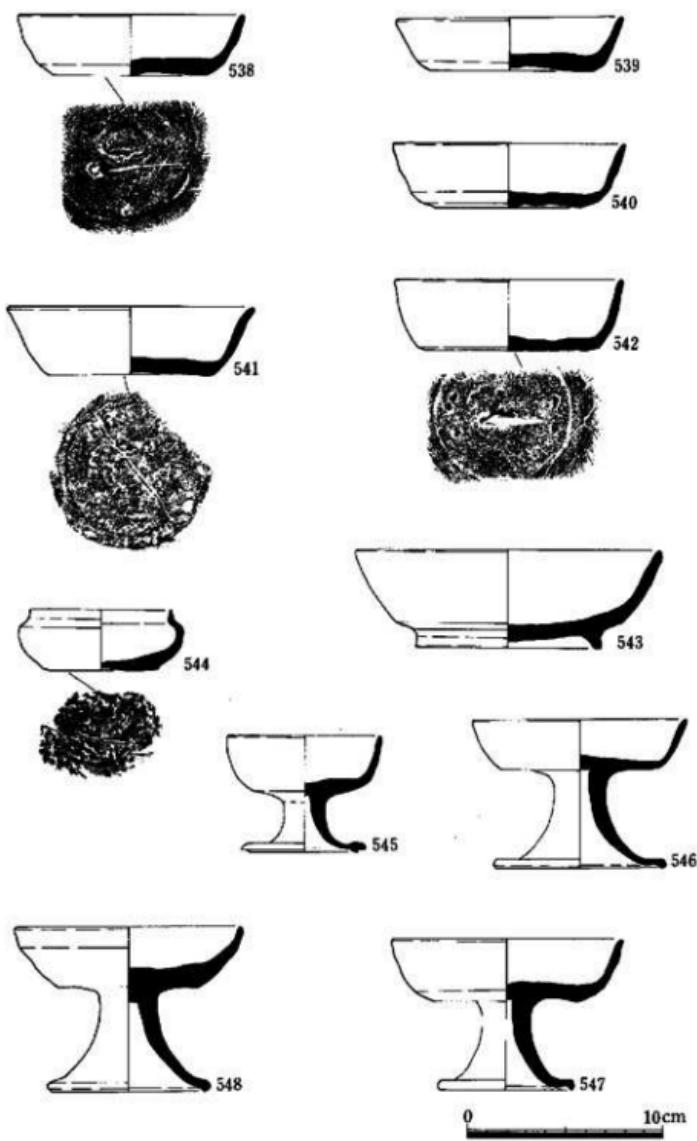


Fig. 36 5号墳出土遺物 (縮尺1/3)

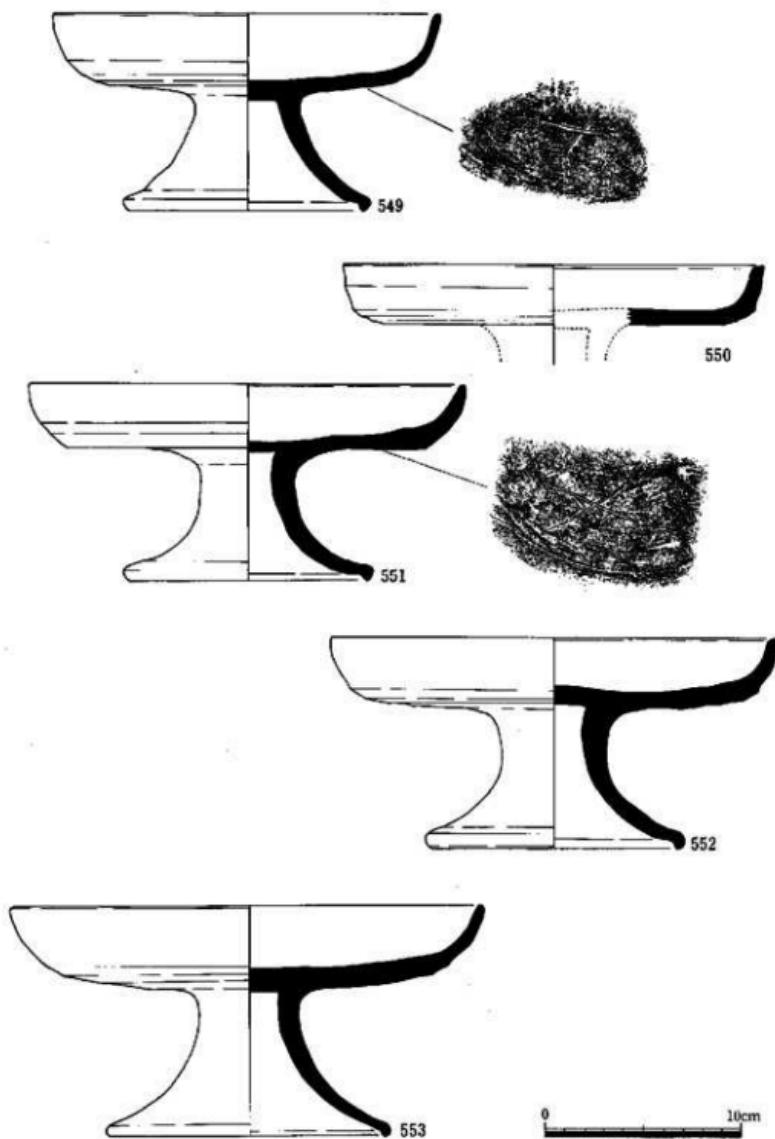


Fig. 37 5号墳出土遺物（縮尺1/3）

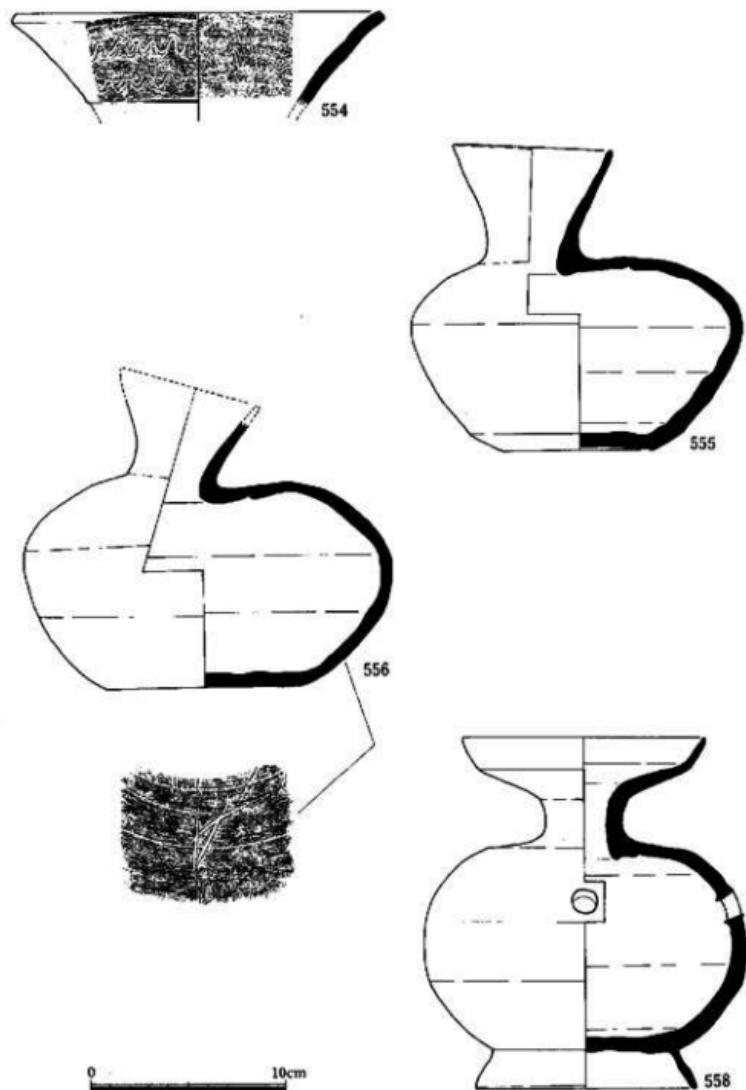


Fig. 38 5号墳出土遺物 (縮尺1/3)

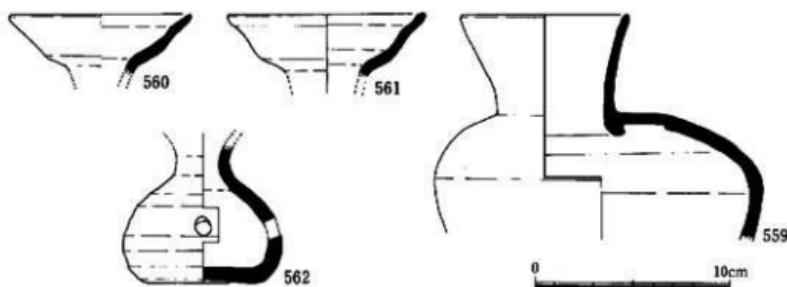


Fig. 39 5号墳出土遺物（縮尺1/3）

装身具 (Fig. 40 図版39)

ガラス玉(570) 青色。1点だけ出土。

耳飾(571,572) 571、572は青銅地銀張りの耳飾りである。直径2cmの円形をなし、断面は円形を呈し、径0.4cmを測る。

鉄器 (Fig. 40 図版39)

小刀(574) 574は茎端を欠き、全形は不明。

鎌(575) 575の鎌身は小さく鋭く、範被幅より僅かに大きい膨らみを持つ柳葉形。鎌身は長さ1.5cm、幅0.8cm前後を測る。長い範被の断面形は隅丸方形。

鎌先(576) 576はU字形をなし、断面形はY字形を呈する。基部幅16cm、長さ19cm(復原推定値)。1点だけ出土した。

その他の遺物

墳丘からは、古墳の築造、葬祭に関係しない遺物、弥生土器片(表)、石鎌等が出土している。地形的に集落が形成されるところではないので、留意される。

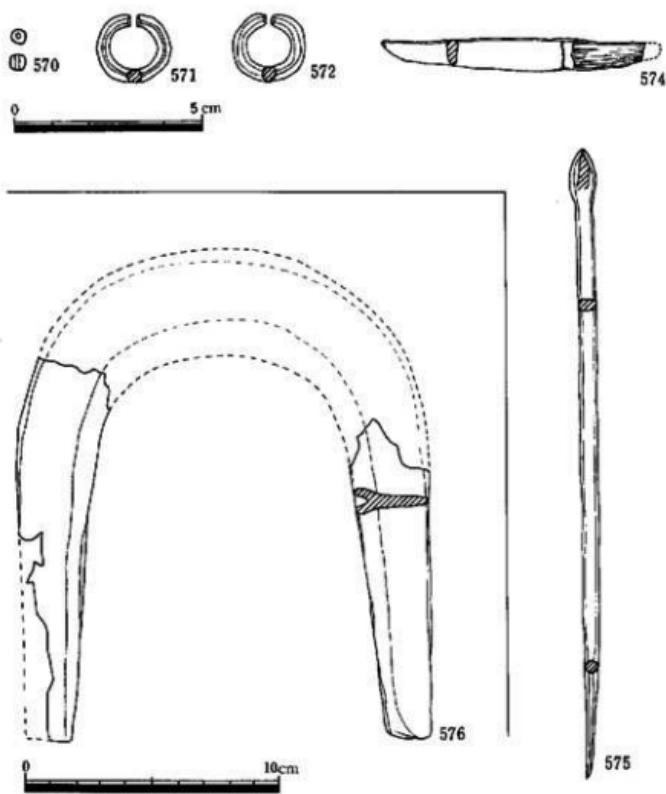


Fig. 40 5号墳出土遺物 (縮尺 1/3・2/3)

7. その他の造構

本調査では、5基の古墳調査において、6基の土壙を検出した。SK01～06の土壙は主に5号墳の墳丘裾部に位置する。土壙内面は全て焼けており、周辺の羽根戸古墳群中でも認められる土壙と同じ状況を呈する。土壙の規模は個体差がある。

土 壙 (Fig. 41～45 図版37)

土壙SK01 5号古墳の墳丘南裾部に位置する。古墳中心から南へ6m。東西1.8m、南北1.8m、深さ0.8mを測る。

土壙SK02 5号古墳の墳丘南裾部に位置する。土壙SK01から南へ2m。円形の平面形を呈し、径1.5mを測る。底部は平坦、壁は直立する。

土壙SK03 5号古墳の墳丘東裾部に位置する。楕円形の平面形を呈し、東西0.9m、南北1.2m、深さ0.6mを測る。底部は平坦、壁は緩やかに立ち上がる。

土壙SK04 4号古墳の北6mに位置する。長方形の平面形を呈し、東西1.2m、南北0.7m、深さ0.5mを測る。底部は平坦、壁は緩やかに立ち上がる。

土壙SK05 5号古墳の墳丘頂部近くに位置する。古墳の中心から北へ1.5m。円形の平面形を呈し、径1mを測る。底部は平坦、壁は緩やかに立ち上がる。

土壙SK06 5号古墳の墳丘北西裾部に位置する。隅丸方形の平面形を呈し、東西1m、南北0.9m、深さ0.3mを測る。底部は平坦、壁は緩やかに立ち上がる。

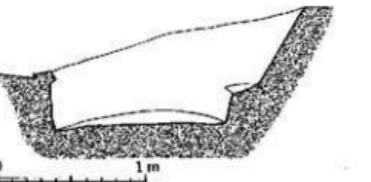
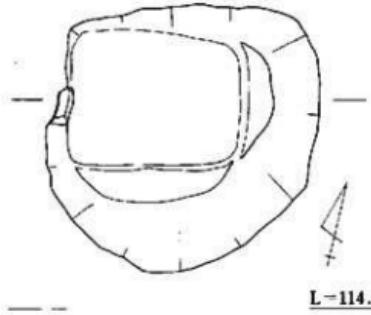


Fig. 41 上壙SK01 (縮尺 1/40)

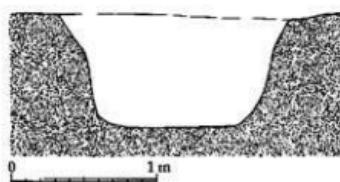
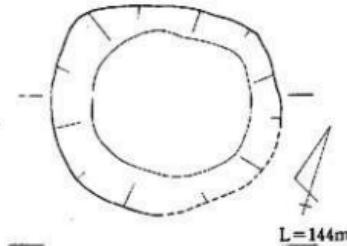


Fig. 42 上壙SK02 (縮尺 1/40)

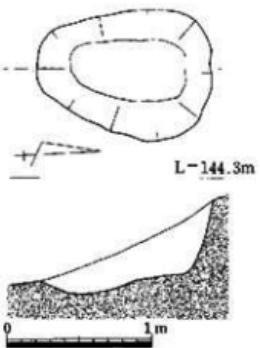


Fig. 43 土壌SK03 (縮尺 1/40)

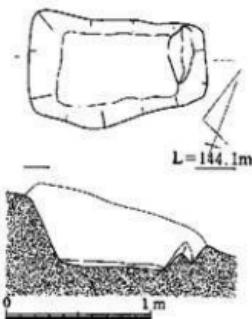


Fig. 44 土壌SK04 (縮尺 1/40)

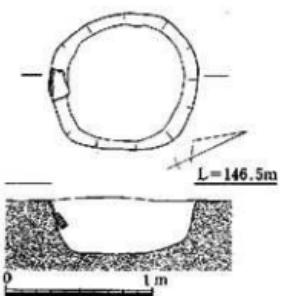


Fig. 46 土壌SK06 (縮尺 1/40)

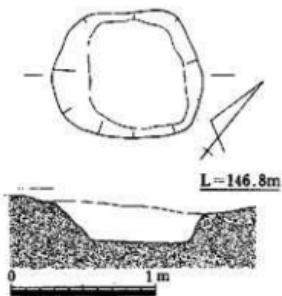


Fig. 45 土壌SK05 (縮尺 1/40)

第4章 まとめ

今回の調査は、市域の西部に位置する飯盛山山麓に所在する羽根戸古墳群Q群の調査であった。古墳群は5基の円墳から構成されていた。調査は1・2号墳を玄室内の確認、3~5号墳を発掘調査した。本章では、調査の成果をまとめるとともに問題点を取り上げ、今後の周辺地域における調査研究を進めるための手がかりとしたい。

古墳の位置 古墳群Q群は、標高145~160mを測り、飯盛山山麓の丘陵斜面に位置する。羽根戸古墳群中においては、山奥に築造されている点やその標高は他の古墳群と比べて際立っている。この要因が、古墳の築造時期に起因するのか、被葬者および陪葬者を中心とした集団の社会的性格に起因するのかは今後の問題である。

古墳の造営年代 出土遺物、特に須恵器を中心とした出土資料の検討から、7世紀前半期に比定されよう。さらに年代を観定するのであれば、各古墳の築造、初葬の時期を3~4号墳は7世紀の第1~2四半世紀、5号墳は7世紀の第2~3四半世紀に位置付けるのが妥当と考える。したがって、この古墳群は、古墳を築造していた時期において最終末になる。羽根戸古墳群中では、最も時期の新しい古墳群である。1・2号墳については、時期決定できる資料が極めて乏しいので、古墳群中の造営範疇で考える必要があろう。

追葬について 3号墳は、玄室の擾乱等により葬送時の状況を知ることができなかったものの、点数は少ないが遺物の年代が時期幅を呈していないことから、追葬は行われなかつた可能性が高い。4号墳も、遺物の年代が時期幅を呈していないこと、玄室内に擾乱等も認められないことから、追葬は行われなかつた可能性が高い。5号墳は、遺物の年代が時期幅を呈していることから、1~2回の追葬が7世紀の第3四半世紀までに行われているようである。

被葬者 大半の古墳の玄室内が擾乱を受けていたために、副葬品の遺存状況および出土点数は良好とは言い難いが、出土品から葬送儀礼の一端を知ることが可能である。さらに、副葬品の品々は、被葬者および陪葬者を中心とした集団の社会的性格を示している場合が多い。本書の羽根戸古墳群Q群では、5基の古墳のうち少なくとも3基の古墳には鉄製の鋏先が副葬されていた。これは、単に当時の一般的葬祭で普遍的に用いられていたとは考えられず、古墳群の造営に直接的に関係する集団、被葬者を中心とした集団の社会的性格を示していると思われる。すなわち、鉄製品の生産に関係していた集団と思われる。

Group Q of the Hanedo Tumulus Cluster

Group Q of the Hanedo tumulus cluster, located in Hanedo, Nishiku, Fukuoka City, was excavated between the 23rd October, 1989 and 5th May, 1990 by the Fukuoka City Board of Education. The Hanedo tumulus cluster is located on the top a hill offshooting from the 382m high Mt. Imori, and consists of approximately 150 tumuli (kofun) constructed from the 6th to early 7th centuries AD. These 150 odd tumuli were divided using their relative locations into 17 groups, termed groups A-Q. Group Q, the subject of the excavation, was discovered in 1989, and consists of 5 circular burial mounds, numbered 1 to 5. Two methods of survey were employed. The dimensions of the interior of stone burial chamber burial mounds No.1 and No.2 were measured as they were designated for preservation, while mounds No.3 to 5 were excavated.

Built on the southern incline of a hill measuring 145-160m above sea level, group Q holds the highest position in the tumulus cluster. The stone burial chamber of all 5 tumuli had been partially opened previously, and their main burial chambers looted and ransacked, and therefore the state of the burial chamber at the time of the funerary ceremony was destroyed.

The mounds of all the tumuli are round in shape, with their main burial components being a stone burial chamber with a horizontal passageway. On the southern part of the mound of tumuli No.3 and No.5, stones were laid in several rows. Having been constructed on the southern incline of the hill, the mound structure would have been susceptible to collapse. These stones may have been placed as a prevention against this. Stones were laid at the foot of the mounds in group VI of the Hiroishi tumulus cluster and group D of the Nokata tumulus cluster for the same purpose.

The stone chamber of tumulus No.4 is particularly small compared to that of the other tumuli, and therefore may have been used for the burial of a child. It is thought that, with the exception of tumulus No.4, the primary burial of all the tumuli was an adult.

In light of the artifacts accompanying the burial, and in particular the Sue ware (a type of dark, wheel-made, high-fired pottery), the construction period of group Q of the tumulus cluster has been dated to be from the late 6th to the first half of the 7th century AD.

As the structural elements of the tumulus cluster is thought to be based of kin relations, it is assumed that each tumulus in group Q of the cluster also has a similar relationship. In addition to this, iron spade-tips accompany the burial in all of the tumuli in this group.

However, this is thought to represent the character the small social group centred around the buried, rather than the result of a common funerary ceremony of the same region during the same period.

Survey findings of tumuli No.1-5 which constitute group Q of the tumulus cluster.

Tumulus No.	Type	Mound diameter	Main component	Main chamber dimensions depth × width × height(m)	Secondary chamber	Funerary objects	No. times burials made	Construction period AD
No.1	circular	—	stone chamber with horizontal passageway	1.8×1.7×—	none	iron spade-tip(1)	1	7th century
No.2	circular	—	stone chamber with horizontal passageway	1.3×1.8×—	none	ear ornament(1), iron spade-tip(1)	1	7th century
No.3	circular	8~9m	stone chamber with horizontal passageway	2.1×2.0×2.0	none	Sue ware, ear ornament(1), iron spade-tip(1)	1	early 7th century
No.4	circular	5m	stone chamber with horizontal passageway	0.9×9.0×—	none	Sue ware, iron spade-tip(1)	1	early 7th century
No.5	circular	10~12m	stone chamber with horizontal passageway	2.2×1.8×2.0	yes	Sue ware, ear ornaments(2), iron spade-tip(1), iron arrowhead(1)	2	early 7th century

羽根戸古墳群周辺主要遺跡調査報告書

- 福岡市教育委員会 「古石古墳群」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第41集 1977年
 福岡市教育委員会 「古石古墳群」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第195集 1989年
 福岡市教育委員会 「古石古墳群」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第214集 1989年
 福岡市教育委員会 「生松台」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第226集 1990年
 福岡市教育委員会 「野方中原遺跡調査概報」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第30集 1974年
 福岡市教育委員会 「野方久保遺跡1-3次調査報告書」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第300集 1992年
 福岡市教育委員会 「草場古墳群1-3次調査報告書」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第301集 1992年
 福岡市教育委員会 「羽根戸「滝」」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第134集 1986年
 福岡市教育委員会 「羽根戸「滝」」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第180集 1988年
 福岡市教育委員会 「羽根戸「滝」」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第198集 1989年
 福岡市教育委員会 「牛多田遺跡」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第27集 1974年
 福岡市教育委員会 「宮の前遺跡F地点」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第13集 1971年
 福岡市教育委員会 「下山門遺跡」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第23集 1973年
 福岡市教育委員会 「下山門乙女田遺跡」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第170集 1987年
 福岡市教育委員会 「都地・七反川遺跡」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第233集 1990年
 福岡市教育委員会 「櫻木-丁田遺跡」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第220集 1990年
 福岡市教育委員会 「金武古墳群発掘調査報告」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第15集 1971年
 福岡市教育委員会 「影塚1号墳発掘調査報告」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第21集 1971年
 福岡市教育委員会 「慈永アラタ古墳群」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第56集 1980年
 福岡市教育委員会 「重要遺跡確認調査報告書I」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第68集 1981年
 福岡市教育委員会 「重留C群第1号墳」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第97集 1983年
 福岡市教育委員会 「孟留遺跡」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第178集 1988年
 福岡市教育委員会 「原遺跡(1)」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第178集 1988年
 福岡市教育委員会 「原遺跡(2)」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第178集 1988年
 福岡市教育委員会 「原遺跡(3)」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第215集 1990年
 福岡市教育委員会 「原遺跡(4)」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第233集 1990年
 福岡市教育委員会 「有田七田前遺跡」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第95集 1983年
 福岡市教育委員会 「有田周辺遺跡調査概報」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第43集 1977年
 福岡市教育委員会 「有田・小田部第1集」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第58集 1980年
 福岡市教育委員会 「有田・小田部第2集」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第81集 1982年
 福岡市教育委員会 「有田・小田部第3集」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第84集 1982年
 福岡市教育委員会 「有田・小田部第4集」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第96集 1983年
 福岡市教育委員会 「有田・小田部第5集」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第110集 1984年
 福岡市教育委員会 「有田・小田部第6集」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第113集 1985年
 福岡市教育委員会 「有田遺跡群」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第129集 1986年
 福岡市教育委員会 「有田・小田部第7集」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第139集 1986年
 福岡市教育委員会 「有田・小田部第8集」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第155集 1987年
 福岡市教育委員会 「有田・小田部第9集」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第173集 1988年
 福岡市教育委員会 「有田・小田部第10集」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第212集 1989年
 福岡市教育委員会 「有田・小田部第11集」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第234集 1990年
 福岡市教育委員会 「有田・小田部第12集」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第264集 1991年
 福岡市教育委員会 「有田・小田部第13集」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第41集 1977年
 福岡市教育委員会 「有田・小田部第14集」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第266集 1991年
 福岡市教育委員会 「有田・小田部第15集」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第307集 1992年
 福岡市教育委員会 「有田・小田部第16集」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第308集 1992年
 福岡市教育委員会 「山ノ花1号墳」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第309集 1992年
 福岡市教育委員会 「西部地区埋蔵文化財調査報告書」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第64集 1981年

- 福岡市教育委員会 「田村遺跡Ⅰ」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第89集 1982年
 福岡市教育委員会 「田村遺跡Ⅱ」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第104集 1984年
 福岡市教育委員会 「田村遺跡Ⅲ」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第167集 1987年
 福岡市教育委員会 「田村遺跡Ⅳ」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第168集 1987年
 福岡市教育委員会 「田村遺跡Ⅴ」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第192集 1988年
 福岡市教育委員会 「田村遺跡Ⅵ」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第200集 1989年
 福岡市教育委員会 「田村遺跡Ⅶ」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第216集 1977年
 福岡市教育委員会 「田村遺跡Ⅷ」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第302集 1992年
 福岡市教育委員会 「給六町ツイジ遺跡」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第92集 1983年
 福岡市教育委員会 「給六町平田通路－第一次調査－」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第305集 1992年
 福岡市教育委員会 「次郎丸高石通路」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第69集 1981年
 福岡市教育委員会 「四箇間辺通路調査報告書(1)」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第42集 1977年
 福岡市教育委員会 「四箇間辺通路調査報告書(2)」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第47集 1978年
 福岡市教育委員会 「四箇間辺通路調査報告書(3)」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第51集 1980年
 福岡市教育委員会 「四箇間辺通路調査報告書(4)」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第63集 1977年
 福岡市教育委員会 「四箇間辺通路調査報告書(5)」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第100集 1981年
 福岡市教育委員会 「四箇通路」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第172集 1987年
 福岡市教育委員会 「四箇通路群第23次調査報告書」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第196集 1989年
 福岡市教育委員会 「四箇通路」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第199集 1989年
 福岡市教育委員会 「吉武塚原古墳群」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第54集 1980年
 福岡市教育委員会 「吉武遺跡群Ⅰ」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第127集 1986年
 福岡市教育委員会 「吉武高木一弥生時代葬送跡の調査概要」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第143集 1986年
 福岡市教育委員会 「吉武遺跡群」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第187集 1988年
 福岡市教育委員会 「吉武遺跡群Ⅳ」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第194集 1989年
 福岡市教育委員会 「吉武遺跡群Ⅴ」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第303集 1992年
 福岡市教育委員会 「太田遺跡(Ⅲ)」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第304集 1992年
 福岡市教育委員会 「今山遺跡(1)」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第22集 1973年
 福岡市教育委員会 「今山・今宿遺跡」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第75集 1981年
 福岡市教育委員会 「今宿五郎江遺跡Ⅰ」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第132集 1986年
 福岡市教育委員会 「麻崎遺跡」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第62集 1981年
 福岡市教育委員会 「麻崎遺跡」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第80集 1982年
 福岡市教育委員会 「麻崎遺跡Ⅲ」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第137集 1986年
 福岡市教育委員会 「麻崎遺跡Ⅳ」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第138集 1986年
 福岡市教育委員会 「幕崎遺跡Ⅴ」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第232集 1990年
 福岡市教育委員会 「県立大野二才株関係埋蔵文化財調査報告書(1)」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第52集
 1980年
 福岡市教育委員会 「入部Ⅰ」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第235集 1990年
 福岡市教育委員会 「入部Ⅱ」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第268集 1991年
 福岡市教育委員会 「入部Ⅲ」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第310集 1992年
 福岡市教育委員会 「鷲山Ⅰ」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第236集 1990年
 福岡市教育委員会 「鷲山Ⅱ」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第269集 1991年
 福岡市教育委員会 「鷲山Ⅲ」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第311集 1992年
 福岡市教育委員会 「鷲山Ⅳ」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第312集 1992年
 福岡県労働者住宅生活協同組合 「宮の前遺跡A～D地点」 1971年
 福岡県教育委員会 「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第1集」 1970年
 福岡県教育委員会 「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第3集」 1973年
 福岡県教育委員会 「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第4集」 1976年

図 版



調査途中の雪積風景

羽根戸古墳群Q群

図版 1



(1) 調査地周辺航空写真 (1948年)

図版 2



(1) 調査地周辺航空写真 (1969年)

図版3



(1) 調査地周辺航空写真 (1979年)

羽根戸古墳群2

図版4



(1) 調査地周辺航空写真 (1983年)



(1) 調査地周辺航空写真 (1987年)

図版 6



(1) 古墳群Q群発見状況（南から）



(2) 1・2号墳発見状況（南から）



(1) 古墳群Q群調査前全景（南東から）



(2) 古墳群Q群調査前全景（南から）

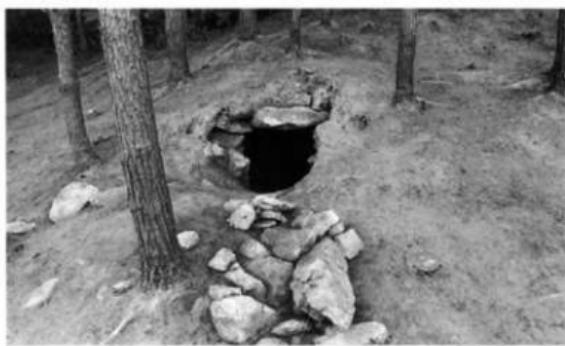
図版 8



(1) 1・2号墳全景(南から)



(2) 1号墳開口部(南から)



(3) 2号墳開口部(南から)



(1) 墓丘遺存状況（南東から）



(2) 墓丘除去後（南東から）

図版10



(1) 3・4・5号墳石室石積状況（南東から）



(2) 3・4・5号墳石室石積状況（南東から）



(1) 3・4・5号埴石室石積状況（南から）



(2) 3・4・5号埴石室石積状況（南から）

図版12



(1) 3号墳調査前（南から）



(2) 3号墳墳丘遺存状況（南から）



(1) 3号墳閉塞状況（南から）



(2) 3号墳閉塞状況（北から）



(3) 3号墳閉塞状況（玄室から）

図版14



(1) 3号墳墳丘遺存状況（南から）



(2) 3号墳石室石積状況（南東から）



(1) 3号墳玄室（羨道から）



(2) 3号墳玄門・羨道（奥壁から）

図版16



(1) 3号墳玄室床面（羨道から）



(2) 3号墳玄室床面（奥壁から）

図 版17



(1) 3号墳玄室右側壁



(2) 3号墳玄室左側壁

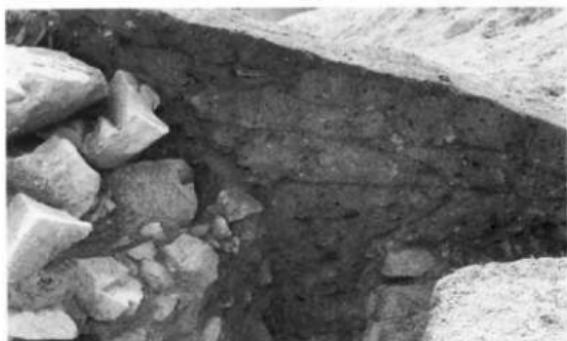
図版18



(1) 3号墳墳丘南半部除去後（南から）



(2) 3号墳墳丘断面（南から）



(3) 3号墳墳丘断面（東から）



(1) 3号墳石室石積状況（南から）



(2) 3号墳石室石積状況（南東から）



(3) 3号墳石室石積状況（南西から）

図版20



(1) 3号墳石室石積状況（南から）

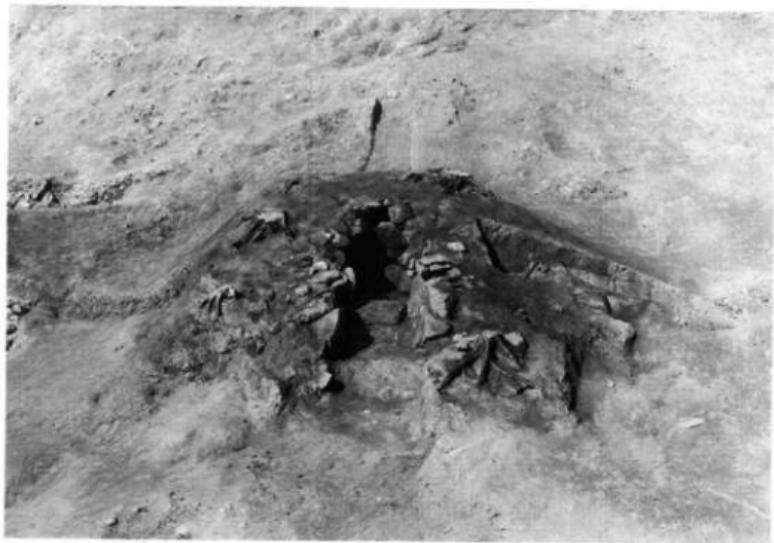


(2) 3号墳墓壙掘方（南から）

図版21



(1) 4号墳調査前（南から）



(2) 4号墳墳丘遺存状況（南から）

図版22



(1) 4号墳閉塞状況（南から）



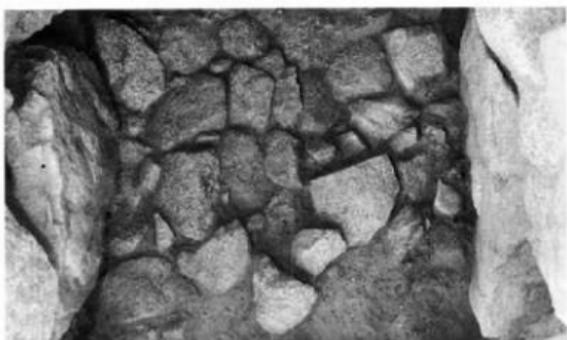
(2) 4号墳閉塞状況（南から）



(3) 4号墳閉塞状況（北から）



(1) 4号墳玄室（羨道から）



(2) 4号墳玄室床面（羨道から）



(3) 4号墳玄室内遺物出土状況

図版24



(1) 4号墳石室石積状況（南から）



(2) 4号墳石室石積状況（東から）



(1) 4号墳墳丘南半部除去後（南から）



(2) 4号墳石室石積状況（南から）



(3) 4号墳墓壙掘方（南から）

図版26



(1) 5号墳発見状況（南から）



(2) 5号墳調査前（南から）



(1) 5号墳閉塞状況（南から）

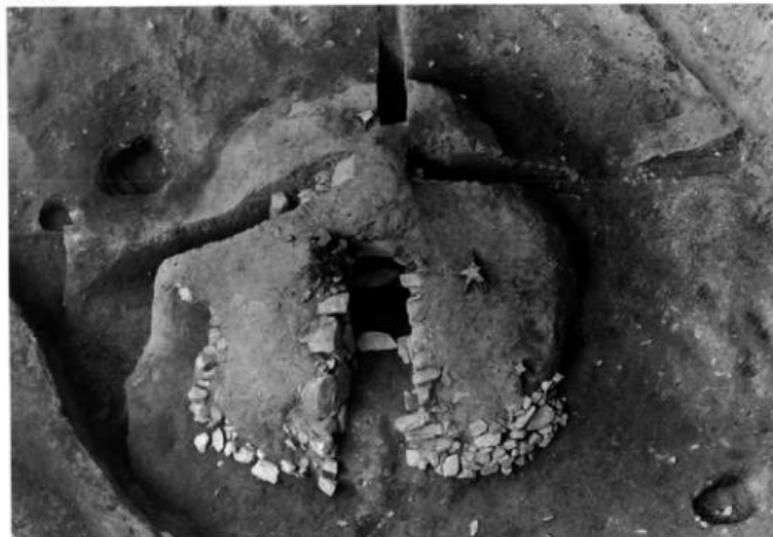


(2) 5号墳閉塞状況（南から）



(3) 5号墳閉塞状況（玄室から）

図版28



(1) 5号墳墳丘遺存状況（南から）



(2) 5号墳墳丘遺存状況（南から）



(1) 5号墳玄室（羨道から）



(2) 5号墳玄門・羨道（奥壁から）

図版30



(1) 5号墳玄室奥壁



(2) 5号墳玄室左側壁



(3) 5号墳玄室右側壁



(1) 5号墳墳丘南半部除去後（南から）



(2) 5号墳墳丘断面（東から）



(3) 5号墳墳丘断面（南から）



(4) 5号墳周溝東部堆積状況

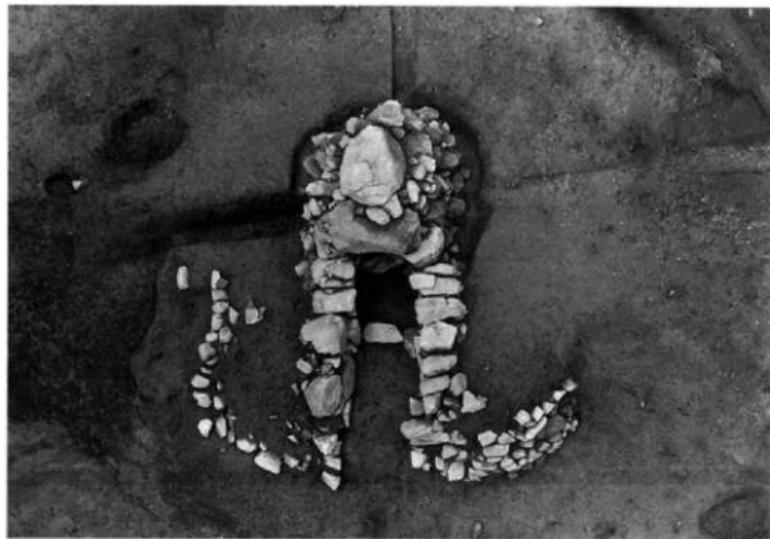


(5) 5号墳周溝北部堆積状況

図版32



(1) 5号墳埴丘除去後（南から）



(2) 5号墳埴丘除去後（南から）



(1) 5号墳墳丘除去後（東から）



(2) 5号墳墳丘除去後（西から）

図版34



(1) 5号墳外護石積部断面



(2) 5号墳外護石積部断面



(1) 5号墳石室石積状況（東から）



(2) 5号墳石室石積状況（西から）

図版36



(1) 5号墳石室石積状況（南から）



(2) 5号墳石室石積状況（南から）



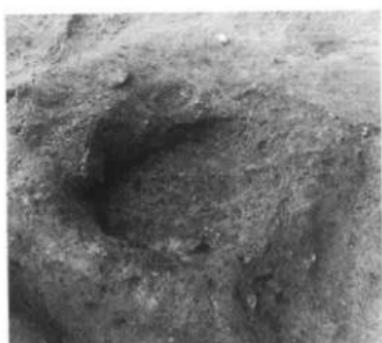
(3) 5号墳墓壇掘方（南から）



(1) 土壙SK01(南から)



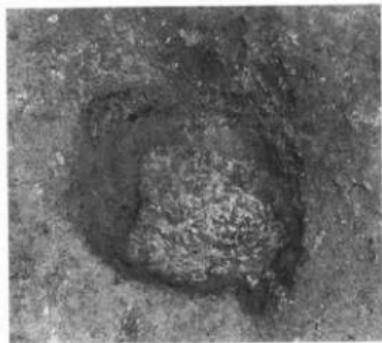
(2) 土壙SK02(東から)



(3) 土壙SK03(北から)

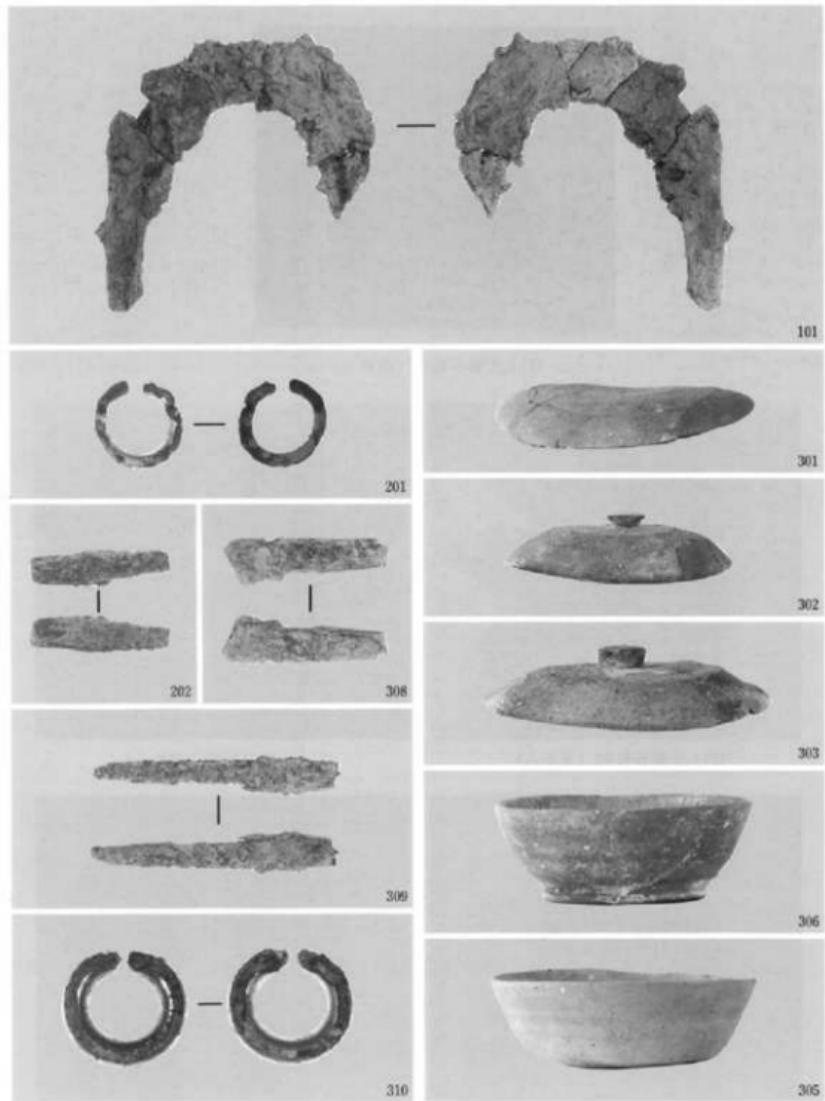


(4) 土壙SK04(北から)

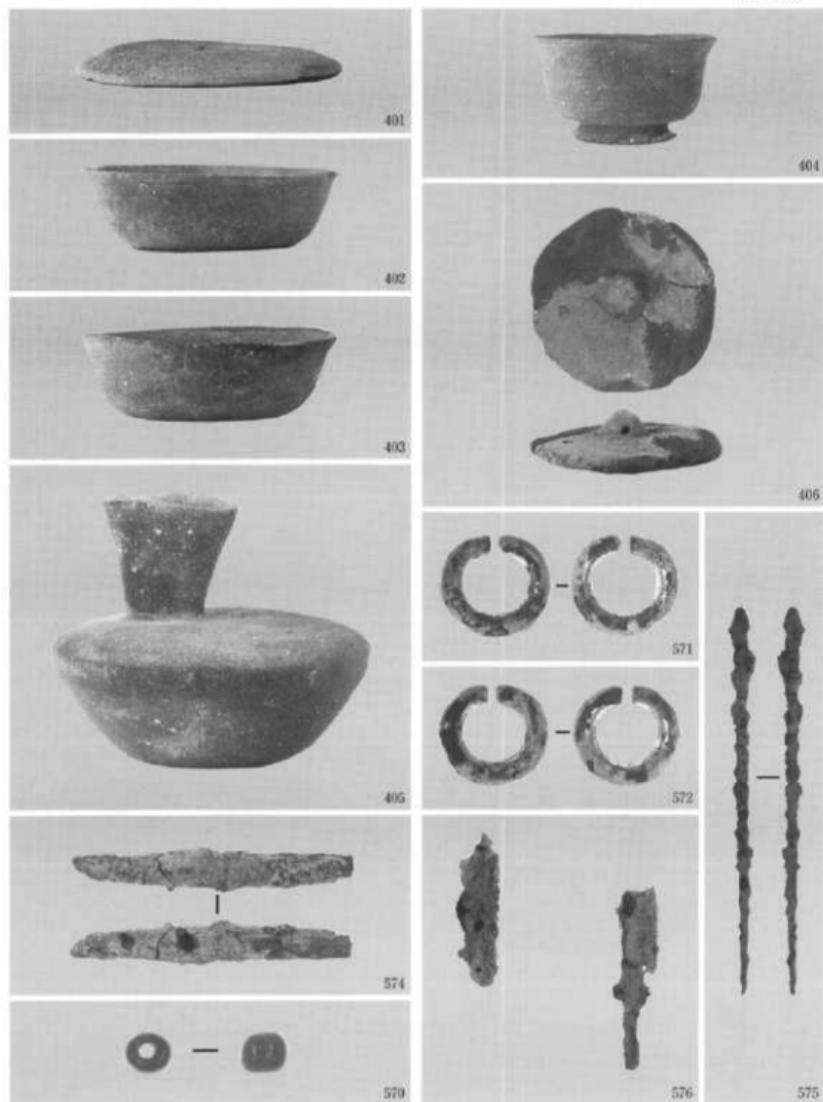


(5) 土壙SK05(東から)

図版38

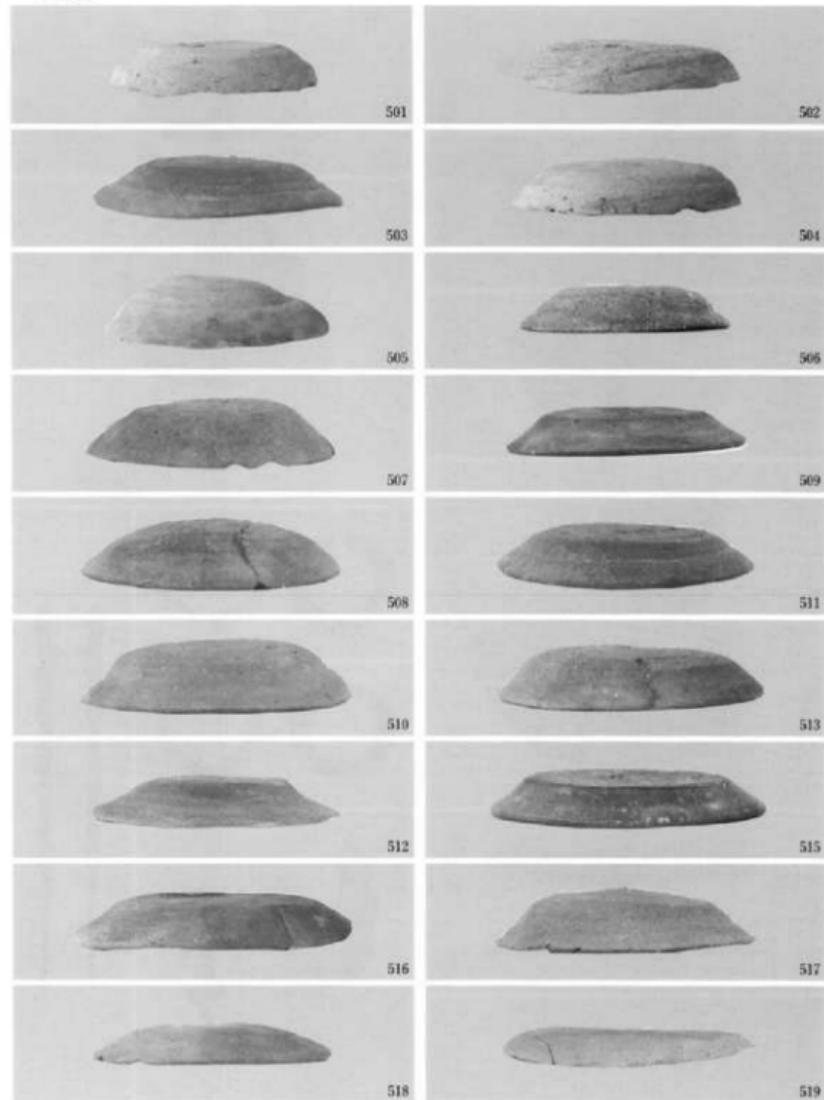


(1) 1・2・3号墳出土遺物

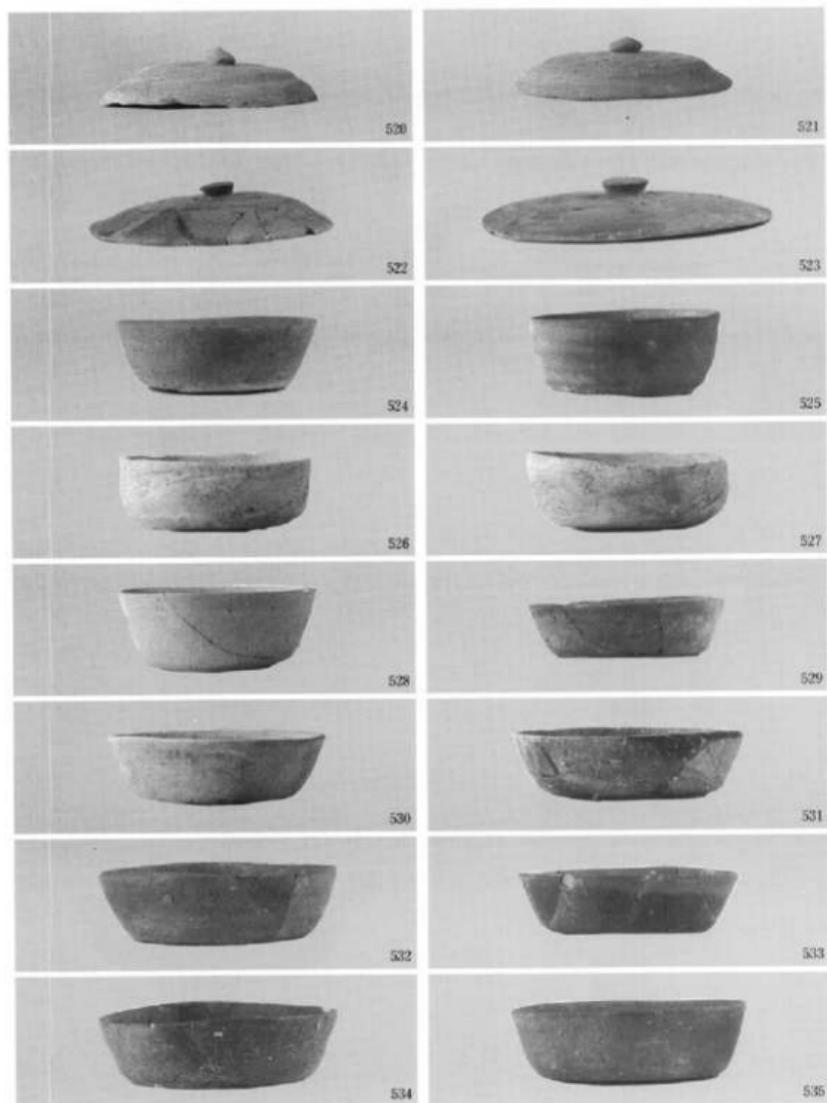


(1) 4・5号墳出土遺物

図版40

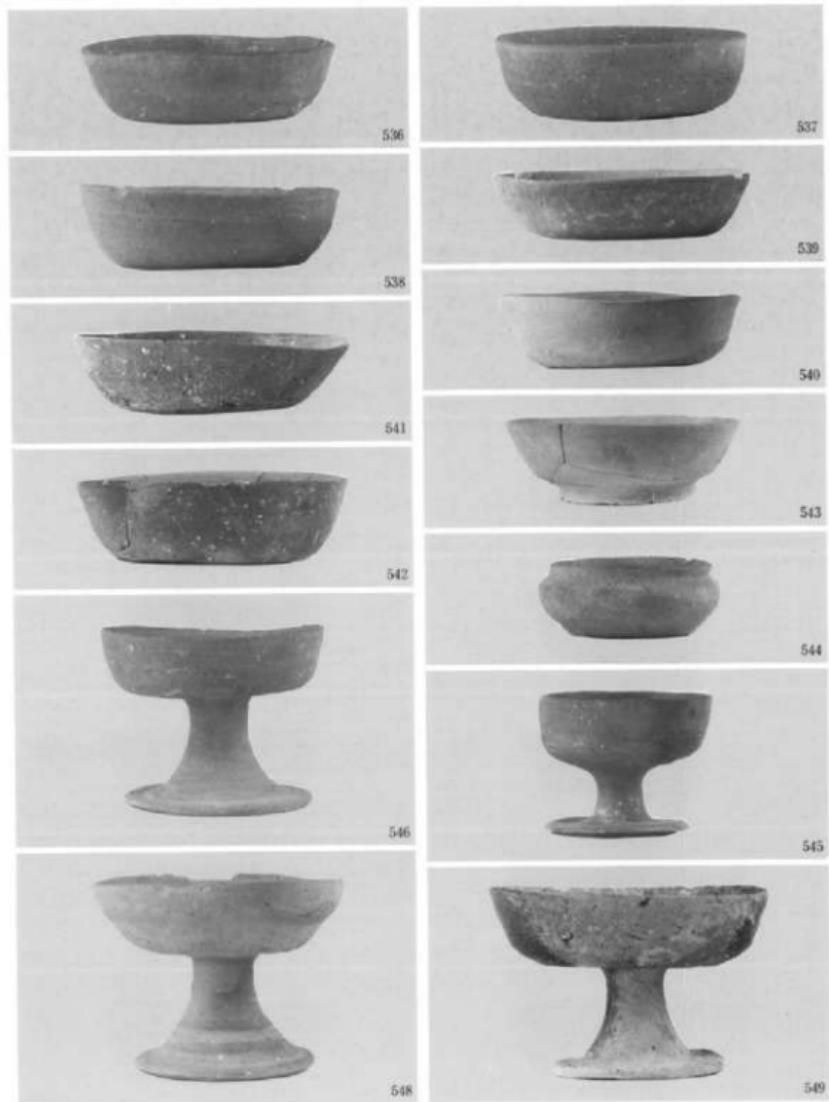


(1) 5号墳出土遺物



(1) 5号墳出土遺物

図版42

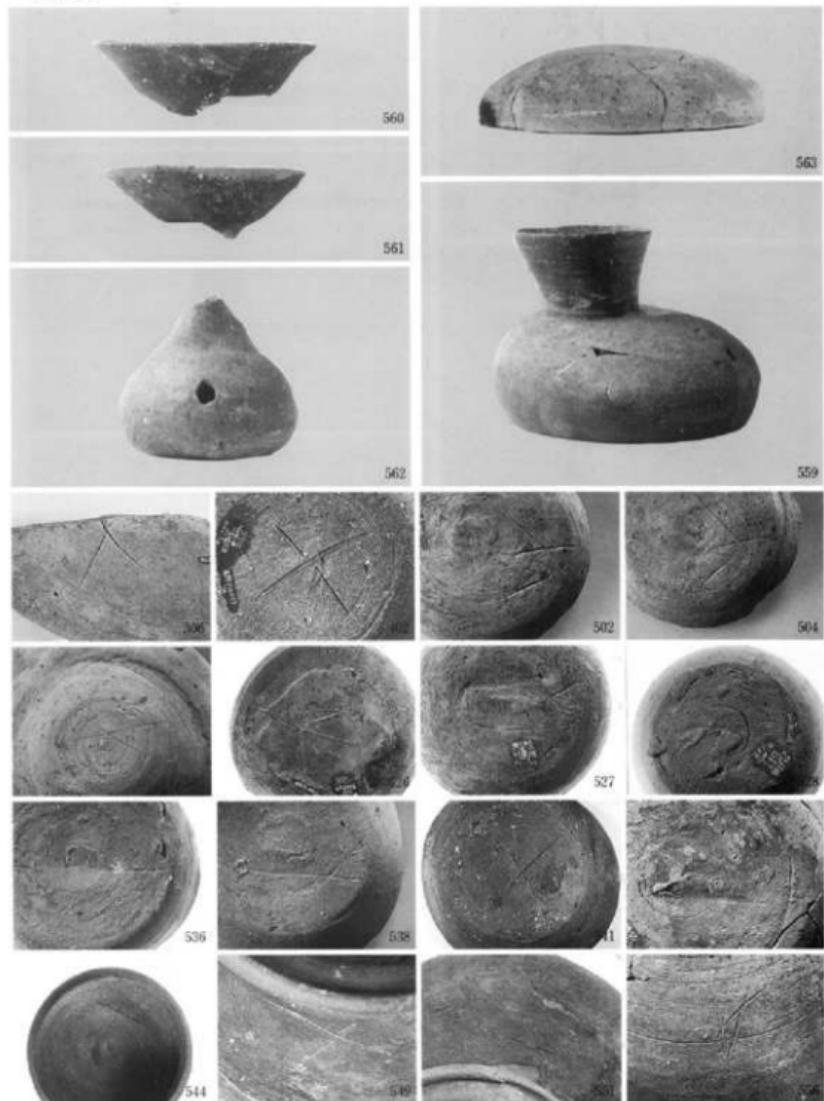


(1) 5号墳出土遺物



(1) 5号墳出土遺物

図版44



(1) 3・4・5号墳出土遺物

羽根戸古墳群2

平成5年（1993年）3月31日 菅行

編集発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号
印刷 秀巧社印刷株式会社

HANEDO KOFUNGUN 2

Excavations and Studies of
Tumulus Cluster
in Hanedo, Fukuoka



March 1993

THE FUKUOKA CITY BOARD OF EDUCATION
JAPAN